

そうだ、スライム（魔獣）でオ○ホを作ろう

赤雑魚

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ちよつと滅びかけの世界で、スライムをテイムした人間がとんでもねえ発想に辿り着いた話。

厳しい世界で、生ぬるい主人公、かわいい女の子達と気楽に楽しくがコンセプト。

そうなるかどうかは置いておいて。

小説家になろう様、カクヨム様にてマルチ投稿しています。

## 目次

鬼と狼とスライムマスター編

スライム解説書	1
そうだ、スライムでオナホを作ろう	5
成功とジレンマ	16
辺境の主	22
「なんでも」	33
フオローミー	44
格闘訓練？	52
従魔士ギルド	58
鬼	67
おわらないで	76
昏い	83
終われ	97
『炎血』	100
『虚狼領域』	110
そうだスライムでオ○ホを作ろう2（上）	124
そうだスライムでオ○ホを作ろう2（下）	133
ちよつとした後の話	142
商業都市ヴァルト編	
品評会	149
見合い	153

# 鬼と狼とスライムマスター編 スライム解説書

『スライム（原種）』

種：粘獣種

分布：世界中

群体型

『魔獣解説』

いろんな意味で有名なモンスターだ。

ぷるりとした半透明の流動体に小さな核を浮かべた、魔獣の中でも  
トップクラスに手抜きデザイン

否、シンプルの究極系

と言える姿を知らない人間は、とんでもない箱入りお嬢様か記憶喪失  
の人間くらいではないだろうか。

なにせ世界中に分布しているのだから、見たことがない人間の方が  
稀である。

小鬼種、ゴブリン魔狼種、ガルム樹木種等の様々な種類の下位モンスター達、彼ら  
は数が多く繁殖能力もあるため、世界的に分布範囲が広いのは当然で  
あるのだがスライムの分布範囲は他の下位モンスターたちすらも圧  
倒する。

なにせ人の住む場所に生息するのはもちろんのこと、湿地、雪原、溶  
岩地帯、毒沼、砂漠、鉱山、深海、禁忌領域、果ては宇宙空間にまで  
存在が確認されているという、呆れるほどに広い分布範囲を持っている  
のだ。

他に住みやすいところがあるだろうにと思わないでもないが、当の  
スライムたちは何を考えたのか過酷極まる環境の中で居座ることを  
選んだ。耐熱、耐冷、耐毒……とにかく、場所に応じた耐性を  
獲得し、様々な環境に適応したのである。

強力な魔獣も避ける極限の環境ですら適応する生存能力、住めない  
場所が存在しないが故に「どこにでもいる」のがスライムというモン

スターなのだ。

おまけにかなりの悪食。

ごく少量ずつではあるが、取り込んだものを魔力に分解して吸収する上に、一定以上の大ききになると分裂して増える。

数百度の高温、絶対零度、猛毒、真空、あらゆる環境で生存する能力は、天変地異を巻き起こす伝説級の魔獣達もビックリである。

そんなケタ外れな生存能力、そして分布範囲を持っている彼らだが、もう一つ特徴がある。

そう、皆もご存じ、弱いのである。

弱い。弱すぎる。

基本的に危険な存在である魔獣の中で、気軽に玩具や食材にされてしまうくらいには弱いのだ。

人の街に現れるスライム（原種）は基本的な大きさが拳サイズ、大きくても犬猫程度。なによりプルリとした身体がただけでない。爪と牙………どころか凹凸もないスライムには攻撃力が無いのだ。おまけに動きも遅い。

「スライムと戦って負けろ」は「トーフの角で頭を打って死ね」と同義なほどに攻撃力が無い。環境適応能力に性能を振り切った反動なのか、一部の種類を除きスライムには外敵に対する対抗手段がほとんどないのである。

「別に環境適応能力があるから死なないじゃん」と思うかもしれないが、その身体に浮かんでいる『核』を抜きとられたり壊されると一瞬で行動不能になる。

なにより致命的なのは本人に戦う意志がないことである。

そう、彼らは戦わない。

人すら超越する分布範囲をもつ王者としての余裕だろうか。なんと彼らは自身の身に危険が迫った時、その脅威を無抵抗で受け止めるのである。

踏み潰されようが、投げられようが、犬に食べられようが、流動体

を削られようが、彼らは抵抗しない。その核を砕かれる最後の状況ですら無抵抗を貫くのである。

何故抵抗しないのか、学会では「種として生存すれば問題ないから」「平和の概念をもつ魔獣だから」「対応するだけの性能がないから」「生きる気力がないから」「お前は聖人か何かか?」「いい加減にしろ」「意味が解らん、やる気を出せ」等、様々な意見でおおいに議論を沸かせた。

なお最近の研究では、スライムが抵抗しないのは「危機的状況に氣付いていないだけ」という説が有力である。

彼らを見ていると生きるという事の意味を考えさせられる。

余談だが、スライムの体は質の良い魔力で構成されているため、食べることで消費した魔力を補填することが出来る。野生の魔獣がスライムを食べるのはこれが理由である。

田舎ではメジャーな食材であり、冷やしてから果汁と混ぜて食べるのが一般的。

暑い日には、つるりとした食感と爽やかなのど越しのスライムを食べて過ごすのもいいかもしれない。

### 『ティマー視点からの解説』

魔獣と契約するには魔力量がある程度、同じである必要がある。

が、スライムは所有する魔力が拳大程度しかないため、よほど魔力が少ない人間でなければ契約できない。

そして「魔力が少ない」ということは、「魔獣の性能強化」や「魔法攻撃」等の戦闘面で様々なハンデを抱えるということである。

下位魔獣にありがちな話だが、種族的に高い戦闘能力を持つとは考えにくいいため、スライムを使役するティマーの指揮能力が問われるこ

とになる。

まあ所詮スライムである。

バックアップするための魔力量、戦闘を有利に運ぶための指揮能力、あるいは魔法によるサポート等、どの力を持つていたとしても、「人畜無害の代名詞」で強さを求めるのは無謀に近い。

スライムと契約した人間という希少さを活かして、スライム専門の研究者を目指すほうが大成する可能性があるかもしれない。

というか、スライムで強さを求めるくらいなら、他のことに情熱を向けたほうがいい。

以上、従魔士専用アプリ『魔獣解説』一部より抜粋

そうだ、スライムでオナホを作ろう

世の中には魔獣が溢れている。

魔獣とは魔力によって蠢く理外の獣であり、そして人類を襲う危険な化け物だ。

どのくらい危険かというと、魔獣が発生し始めて人類の生存圏が6割ほど奪われ、だいたい千年近く、取り返せていない状況が続くくらいには脅威な存在だ。

そして魔獣の大量発生、変種の出現等の大災害イベントが起こるたびに、都市や国があっさり亡んだりするので、人類は現在進行形で滅びに追い込まれている真っ只中である。

まあ現状、すぐに滅んでしまうほど、人類は切羽詰まっているわけではない。

魔獣除け、従魔士による魔獣の間引き、あるいは防壁を築いたり、魔獣への対策をしっかりと行っている場所はそれなりに安全な生活が約束されている。

万が一である大災害が起こらない限りは、まあ平和に暮らすことだって可能なのだ。

まあ僕の場合は、その万が一が起こったわけだが。

いやあ、自分の住んでいる街が地図上から完全消滅したのは衝撃的でしたね。

それなりに栄えていた大きな街だったが一晩で更地である。

運よく助かったが、視界には破壊されつくした建造物、漂う死臭、そしてぶち撒かれた人肉ミートソースを見せつけられれば、この世界の在り方を嫌でも思い知らされるといってもんである。



この世界の命は軽い。

この一言に尽きる。

弱いものから死んでいく、力がなければ抵抗すらできない。

そんなこの世の無情なルールから、せめて最低限の身を守る力が欲しい、そう考えた僕が従魔士<sup>テイマー</sup>を目指すのは当然のことだったと思う。

従魔士とは、魔獣を従える者。

曰く、毒を以て毒を制す。魔獣の脅威をもって、魔獣を倒すために戦場を渡り歩く職業である。

魔獣を扱うため、社会的な地位は低い嫌われ者であるが、多くの国家や都市の防衛戦力として扱われるほどにその存在は大きい。

魔獣を従えるという前提が付くが、それさえクリアすれば、魔獣という戦力が手に入るのだ。

リスクはあるが、基本的にタイムした魔獣はどんな命令でも聞く。自分に従順な戦力を確保できるという事実は非常に魅力的だ。

おまけに従魔士は仕事を斡旋してもらえる上に、国からも様々な支援が受けられる。

ならない理由がない。

というか従魔士になれなければ死ぬ。

住んでた街が減んで両親も死んでしまった上に子供である。後ろ盾もなければ金も無い。

自分で金を稼がなければ待つのは餓死である。生計の目途も立たないのに強さがどうこうとか言っている場合じゃねえ。

血と魔力で魔獣と魂を繋げるやら、失敗すれば死ぬやら、ヤバ気な言葉がいくつも出てきたが、それらは必要なリスクと割り切つて僕は従魔士になることにしたのである。

\*\*\*

結論から言えば、従魔士にはなることが出来た。

従魔士ギルドから仕事を受注できるようになったし、国からの支援を受けられるようにもなった。

しかし、一つだけ問題がある。

テイクした魔獣がスライムなのである。

より正確に言うとなスライムしかテイクできるモンスターがいなかった。

本当はメジャーな魔獣である魔狼系や妖鳥系を狙っていたのだが、僕の魔力が少なすぎてテイクに失敗するとギルドの職員に止められてしまった。

ちなみにテイクに失敗すると、そのままテイクしようとした魔獣に襲われて死ぬ。

「困った、困ったぞ……………」

何が問題か。

このスライム、とにかく弱いのだ。

今まで従魔士という分野に触れたことのない僕でも知っているくらいには弱い。

どこにでもいる魔獣だし、見た目通り危険度なんてないに等しい。まだ街が滅んでいない頃、道に落ちていたスライムを拾ってボール代わりに投げて遊んでいたくらいには無害だ。安価な食材としてスライムゼリーにしておやつに出されるくらいには、弱い魔獣だった。

戦うことが仕事の従魔士にとって致命的である。

「食材じゃ戦えないんだが……？」

手に納まるサイズの小さな相棒をムニムニと握ってみるが、帰ってくる反応は無だ。

タイムした魔獣とは感覚共有できたり、感情を通わせたりできると聞いたが、マジでなんの感情も伝わってこない。

どうしよう。

難度の低いゴブリン討伐の依頼も受けられない。

とうとう当初の目的である「強くなる」が達成できていない。

「外部の知恵に頼ってみるか……？」

従魔士には必須と言われたので、なけなしの金で購入した携帯端末を取り出す。

起動するのは、従魔士のために作成された情報共有アプリだ。

魔獣の分布区域や生態情報、従魔士としての魔獣の運用法、依頼の受注等、おおよそ従魔士に必要なサポートをしてくれる非常に助かる機能がある。

「魔獣解説」の項目を開き、スライムの情報を漁る。

「魔獣の詳細は——知ってることしか書いてない。なら、運用方法は……？」

ダメだ。

概ね弱いという事実しか書かれていない。

とうとうか、全体的に皮肉られた感じで書かれているのは気のせいだろうか。

まあ、ここまでは想定内だ。

次にアプリに設置されている掲示板を開く。

従魔士同士の情報交換、模擬戦闘のセッティング、仕事のメンバー探し、新人へのアドバイス、ただの暇潰し、わりと何でもできる会話機能を使って、スライムの情報を集めることにする。

まあ、あまり期待はできないが有用な情報が見つかれば儲けものだ。

くく

急募：スライムで有用な運用方法について。

1：スライムテイマーさん

ランクE

スライムをテイクしました。

現状、戦う手段が見いだせないなので、スライムで役立つ情報かアイディアをください。

できれば戦闘面で、ゴブリンと戦えるぐらいには強くなりたいです。

スライムの大きさは拳大です。

2：紅蓮さん

ランクB

新人か！ 地獄の従魔士界限へようこそだ！

戦闘面での情報はないが、スライムは食用の他にポーションの原料になる！ 安いがギルドが買い取ってくれるぞ！

3：粗大さん

ランクB

歓迎しよう！ 盛大にな！

戦闘面での情報はないが、確かスライムの従魔士は希少過ぎて歴史上で片手で数える程しかないぞ！ つまり新人がスライムの従魔士の第一人者だ！

4：ドラグーンさん

ランクA

命は大事にして行け。死ななければ全てが安いぞ。

戦闘面での情報はないが、アイツらは与えた環境や食物で特徴的な成長をするぞ。まあ鉱物系や毒系のスライムがそれだな。

スライムで戦う方法は考えてみよう。

5：触手使いさん

ランクS

スライム使いとは珍しいな。

戦闘面での情報はないが、新人が男ならアイツをオナホールにする  
と気持ちがいいぞ。

6：ドーンさん

ランクC

草

7：ドラグーンさん

ランクA

触手使い。それは本当に必要な情報か？

8：触手使いさん

ランクS

新人には少しでも情報が必要だろう。

ふざけてないからな、これは実体験に基づいた情報だ。  
だから怒らないでください。

9：DEMONさん

ランクC

冗談じゃないのか……………

10：薔薇さん

ランクB

これが世界最強の従魔士の一人とか、人類の未来は暗そう。

あと新人は毒系スライムに育成できれば、ゴブリンぐらいは毒で倒  
せるんじゃないか？

まあ近付くまえに死にそうだが。

11：紅蓮さん

ランクB

話を戻すが、ひかえめに言って無理難題だな！

スライムが戦えるイメージが浮かばん！

が、大量の魔力を供給すれば最低限の機動力は確保できるのではないか？

12：二股さん

ランクC

そもそも支援するだけの魔力もないのでは？

スライムとティム成立する魔力量って、辛うじて魔力があるってレベルですよ。たぶん

大量に魔力ポーション飲み続けければ話は別ですけど。

13：ドラグーンさん

ランクA

中毒で寿命が縮むからやめておけ。

知り合いが一人それで死んでる。新人なら財布的にもやさしくないしな。

すまない、戦う方法は投げつけるくらいしか思い浮かばなかった。

14：スライムティマー

ランクE

魔力をどうにか出来れば戦える可能性はあるという事ですか？

15：ひょうすべさん

ランクA

あいつら動くのが致命的に遅いからな……。

素早さが上がれば多少は死にくくなるだろう。

育てて大きくなれば、ゴブリンの顔に張り付いて窒息とか狙えるん

じゃないか？

……肝心の魔力をどうにかする方法を思いつかないが。

16：修羅さん

ランクB

まあ最初はスライムを大きく育てるか、数を増やすかすればいいんじゃないですかね。スライムは気分で餌食わないし、分裂できないしで養殖できなかつたけど、タイムしてるならそれも解決できるでしょ。

スライムの納品依頼はいつでもあるし。

単価は安いけど継続的に売ればそこそこの値段にはなるぞ。

17：薔薇さん

ランクB

スライムの養殖か………。

ポーションの原料なことも考えると、上手く増やせば一儲けできるか？

18：ドーンさん

ランクC

いうてスライムが原料になるってだけで、ポーション原料は樹木魔<sup>トレント</sup>の樹液が主流なんだよな。

供給も安定してるし、よほど質のいいポーションがスライムから作れない限り、儲けるのは難しそう。ポーションの作成も技術と材料が必要だし、新人が急に始めるには厳しいと思うよ。

19：DEMONさん

ランクC

最初は生活を安定させるためにできる事をするしかないと思うぞ。どうしても強くなりたければ、生活に余裕が出てから育成に専念するといい。

まあスライムは群体型の魔獣だから、増やしたスライムも命令を聞

くはず。そんなに維持費もかからないだろうし、とりあえずは数を増やしてみればいいんじゃないか？

くくく

「……………すぐに戦力にするのは無理そうだな」

やはりというか、スライムをテイムした従魔士はいないらしい。まあ、冷静に考えれば当たり前である。

一般家庭の食卓に並ぶような魔獣で、わざわざ戦場に向かおうとする人間なんてそうそういないだろうし。

まあ望みの情報はなかったが、思った以上に役立ちそうな情報や意見が手に入ったとは思う。

掲示板に礼を書き込んでアプリを閉じる。

うーん、とうなりながら考える。

僕はどうしても力が欲しい。

強く在ること、これは絶対に譲れない条件だ。

弱ければこの世界では生き残れない。そして強さには相応の安心と安全が付いてくる。暴力という純粋な力のみが魔獣への抵抗を可能にする。

ただし相棒がスライムであるため、強くなる手段が見つからない。すぐには達成できない以上、現在の優先度は下がる。

であれば、次に必要なものは何か。

「……………金だなあ」

お金だ。

お金が欲しい。

現状、僕は金銭面において余裕がない。

死んだ家族の金でギリギリの生活しているのだ。もうしばらくの余裕はあるが、あとひと月もしない内にそれも尽きる。



とにかく金を稼ぐ必要がある。

しかし、従魔士の稼ぎの主になる戦闘系の依頼を受けることが出来ない。

受注自体は可能かもしれないが、魔力のない人間とスライムで倒せる敵はほとんどいない。何度かは上手くいくかもしれないが、いずれ限界が来るのは目に見えている。

故にスライムを養殖し、納品することで、安定して収入を得る必要がある。養殖できるかという点に不安が残るが、そこは実際に試していくしかないだろう。

タイムしているという強みと、スライムの生態を考えれば不可能ではない筈だ。

ただし、ただ納品するだけでは大した金額にならない。どんな命令も聞くスライムという、僕だけの強みを生かす必要がある。

「そうだ………！」

電撃の如く頭の中を一つの閃きが走り抜ける。

ふざけているとしか思えない、だが成功すれば金銭面の問題を一気に解決できる、間違いなく僕の中で最良の一手。

僕の脳内では、掲示板に書き込まれた、ある従魔士の一文が駆け巡っていた。

——オナホールにすると気持ちがいいぞ。

「そうだ、スライムでオナホを作ろう」

僕はスライムでオナホールを作ることにした。



## 成功とジレンマ

オナホールとは、簡単に説明すると男性向けの性処理グッズである。

筒状のやわらかい材質で作られており、男の特徴的なブツというかなニを突っ込むことで、気持ちよくなるという娯楽の分野に類する商品である。

それを僕はスライムで作って売ろうというわけだ。

そんな発想にたどり着いた僕の行動は早かった。

借りているアパートに備え付けられているバスタブに、スライムと魔獣用の安い魔力餌をぶち込んでおく。エサを食べながら一定の大きさになったら分裂しろとスライムに指示して放置する。

言葉にする必要はない。

魂で繋がっているのだから、食い違いが起ることもない。

そしてタイムした魔獣は、よほどのことがない限り従魔士の命令に逆らわない。

凶悪な魔獣なら主人に歯向かうこともあるらしいが、僕の魔獣はスライムである。伝わってくる感情が無の相棒は文句をいう事もなく、ただひたすらに分裂をつづけていた。

そうして一日も経てば結果が出る。

バスタブの中で大量に蠢くスライムを見て、僕は養殖が成功したことを確信した。

\*\*\*

数か月が経った。

非貫通式スライム型オナホール。

通称「スライムホール」は予想以上に売れた。

というか、大ヒットした。

従魔士は戦場を渡り歩く職業。

魔獣討伐や護衛依頼を受ければ戦闘を行なうし、場合によっては命懸けの状況にも遭遇することになる。それはつまり生存本能というか、遺伝子を残そうという獣の性が刺激されてしまうわけだ。

ぶっちゃけると戦闘を行なったあとはムラムラするのだ。

別に命に関わるとかそういうわけではないが、しかし放っておけばストレスが溜まる。

従魔士の仕事によっては野宿で何日も過ごすこともザラにある。

そんな時にスライムホールだ。

拳大のサイズで持ち運びに便利。

汚れをからめとって魔力に分解してくれるので、時間を空ければ再使用可能な上に衛生面に強い。なにより独特の感触、搾り取るように締め付け、うごめくスライムはかなり気持ちいい。

しかも、何も知らない知り合いに見られても、食材として持つてきたと言い張れるという強みもある。

実際、食べられるし。

そういった手軽さ、隠蔽性の高さからスライムホールは従魔士によく売れた。

なんなら別に従魔士でなくとも普通に売れた。興味を示した一般男性、特に思春期の少年の間で爆発的に人気を得たらしい。

まずはとにかく売ることを重視していたので、安価な値段だったことが理由だろう。

少しばかりアダルトであるが故に開拓が進んでおらず、また競争率が少ない分野であったことも、売れ行きに拍車をかけていた。

他の企業もスライムでオナホールを作ろうとしたり、野生のスライムで代用しようとする者もいたが、スライムに気持ちよく動くように指示しているのは僕である。

飛ばない豚はただの豚、動かないスライムはただのスライムである。実際、野生のスライムはスライムホールほど気持ちよくならないので、皆が首を傾げていた。

もはやオナホールというジャンルにおいて、スライムホールの右に出る者は存在しなかった。

他の魔獣と比べればスライムには爪も牙もなかったが、しかしオナホールとしての才能はぶつちぎっていた。

僕はスライムに手に入る限りの最高級の魔力餌を上げた。

自分の一ヶ月の食費よりも高いエサをもぞもぞと取り込む小さな使い魔。相変わらず感情が希薄過ぎて喜んでいいのかわからない、ご飯のグレードを上げる意味があるのかもわからなかったが、こちらはスライム様の売り上げで食べさせてもらっている身である。

稼ぎ主にいいものを食べさせてもバチは当たらないだろう。

とにかく、納品すればただで売れるので、金銭面の問題は一気に解決した。

小さいが、街の中で店も構えることが出来た。

できるだけお金を使い、寂しい夜を慰めるスライムホールを売るお店だと思わないように、明るく清潔感のある雰囲気演出するように外観と内装を整えた。

そうして完成したのが、世にも珍しいスライム専門店「ウゝズ」だ。

「ウゝズ」はスライム以外に売れるものはなかったが、しかし用意するスライムの質と量だけは他の追随を許さない。競走相手がいないが故に世界最高峰のスライム専門店だった。

表向きは食材用のスライムを扱い、なんならスライムゼリーも食べることが出来るカフェのような機能も兼ねた、ちよつとオシャレなお店……の皮を被ったスライムホールを売りさばくお店だ。

主力商品はスライムホールだったので、当然メインターゲットは従魔士と思春期の少年たち——と、思っていた。

実際はカモフラージュとして用意したカフェが、子どものおやつにスライムを買いに来た主婦のちよつとした世間話の場として利用されたり、お小遣いを握らされた子どもが「スライムゼリー」を食べに来たりするので、割と広い幅の年齢層の客がよく来るようになった。

結果、スイーツに興味のなさそうな厳つい従魔士たちが何故かスライムゼリーを買いに来る、不思議なお店として「ウゝズ」は有名になった。

予想とは違ったが、スライム専門店「ウゝズ」の人気が出てくれる分には何も問題はなく、まあこれでいいかと僕は思った。

だが、スライムを売り始めて一年以上が経った頃だ。

世間話を機関銃の如く話し続けるヴァイオレットヘアーのマダム相手に、ガクガクと首を縦に振っているときに気が付いてしまった。

僕、強くなるの忘れてるじゃん。

いや、強くなることを忘れていたわけではない。

『ウゝズ』の目的の一つは、スライムの育成と研究に掛かるであろう資金難の解決である。強くなるためには必要なことだ。

ただ、スライムホールに加え、結構繁盛している「ウゝズ」のカフェの売り上げで稼げる稼げる。

あまりにもスライム専門店がうまく行き過ぎていて、止め時を見失っていた。

あと単純に忙しかった。

スライムゼリーの果汁混ぜて作るのって結構大変なのだ。何種類も作らないといけないし。スライムを売るのも、カフェの注文を取るのも、会計をするのも全部僕一人である。

そりゃ強くなる暇ないよ。

だって大変だもの、急がしいもの。

オナホだけ売ればよかったのに、飲食業の経営で仕事を増やしたのが響いていた。休日があまり取れないのも地味につらい。

このままではスライム専門店の店長で一生を終えてしまう。

早急に、この状況をなんとかする必要がある。

具体的にいうと、業務を減らしより多くの休日を確保したい。

「……………アルバイトを雇おう」

欲望に忠実な僕は、しばらく考えてかわいいバイトさんを雇うことにした。





## 辺境の主

それは人間に似た姿だった。

野生の狼を思わせるような黒髪と獣のような耳、宝石のような紅い瞳を備えた整った容姿。

もう長いこと、弱く輝く視線を彷徨わせながら、ソレは暗闇の中にいた。

「は……あっ♥」

喘ぐような呼吸を漏らして、ロアがハッと口をつぐむ。

また、意識が飛んでいた。

朦朧とした意識の中で、何度目かの正気に戻る。

「……あ」

まだ拘束の甘い、首を動かして視線を下げる。

どくん、どくと脈打つ赤黒い色の肉塊。

生々しさを感じさせる肉の壁の中に、両手足の半分以上を飲み込まれていた。

その酷くおぞましい魔物の中に、もう長いこと少女は囚われたまま逃げ出せずにいた。

なんのことはない。

自分は人の住む街ではなく、魔獣が蠢く安全圏の外で野宿をしたというだけだ。

一歩間違えれば自殺と何ら変わらない行動。だがロアにはそうするだけの事情があった。だから危険であると承知の上で野宿をした。

何度も安定区域外での野宿は経験していたし、多少の魔獣なら撃退できるだけの実力があった。

想定外だったのは、野宿に選んだ場所一帯をなわばりにしている魔獣と出くわしたこと。

そしてその魔獣が規格外に強力だったという事だ。

結果、一瞬で無力化され、呑み込まれた。

それから、もう長いこと、息苦しさを感じるほどの閉塞された空間で、無数に生え蠢く触手に四肢を締められるように巻きつかれ、身じろぎすることすら難しい拘束を与えられている。

痛みはないが、どれだけロアが暴れても拘束が緩む気配はない。ただ消耗されるだけの体力が、ロアに無力感を教えていた。

「……………っ♡」

服の下に潜り込み、触手に内股をぬらりと撫で上げられ、びくりと腰を浮かせる。

苦痛による反射ではない、ただ純粹に肌を擦られた快感に身体が起こした生理的な反応だ。

この魔物についてロアが理解したことが一つあった。

脱力して俯いていた顔をゆるゆると上げて、身体にまとわりつく触手を見る。

蛸や烏賊を思わせる軟体生物めいた肉色の触手。

嫌悪感すら湧き上がる異物を光らせる、とろりとした白みがかかった粘液。

この魔物の分泌する生臭い液体には、身体感覚を鋭敏にし、また興奮させる作用があった。

媚薬……………などという生易しいモノには例えるまい。

粘液は毒だ。

それも使われるたびに効果の上がる、とびきり性質の悪い毒液だ。

抵抗できないままに塗りたくられて、身体を撫でられるだけで気持ちよくなってしまう。

必死になって暴れて抵抗し、それでもやめてもらえずに、問答無用で徹底的にロアは粘液漬けにされた。

いまでは衣擦れや肌を撫でる空気すら、彼女を責め上げる。

頬が赤く上気し、浅くはやい呼吸を繰り返す。

無視のできない触手の接触に加え、休むことのできない状況下での長時間の拘束は、ロアを弱らせきつていた。

「……………っは、……………あ♥。……………っ!？」

漏れ出る声を抑えて体をよじる。

意地だった。

ロクな抵抗も出来なくなった彼女の、僅かばかりの反抗。

だが触手は知ったことかとばかりに蠢き続ける。

服の下に潜り込み、快感で反り返った腹を撫で上げられ、触手から逃げるように丸めた背筋を這いずられる。気持ちよさから逃れようと体を反らしたその場所へ、先回りして撫でさする。

じわじわと味わうように、楽しむように、なによりロアを追い詰めるように。

ビクリと身体を動かす彼女に反応するように、暗闇から這い寄るように、一匹また一匹と触手が現れては彼女を責め立てる。

もう長い時間、ロアは触手に弄ばれていた。

「……………っ♥……………♥」

体中に広がる甘い痺れを感じながら、ロアはびくびくと痙攣を繰り返していた。

触手に撫でられても脱力したままロクな反応がない。

頭部は首が座らずにガクリとぶら下がるように揺れているし、ロアの瞳はぐるりと裏返ってしまっている。

途切れることのない快樂の連続、意識を反らすこともできずに積み重なるソレはもはや拷問に近い。

長時間に及ぶ触手の愛撫は、ロアを心身ともに疲弊させきつていった。

動かなくなつたロアに気が付いたのか、彼女の体を這いずつていた触手たちが動きを止める。

しばらくして、状態を確かめるように気を失つたロアを揺すり、頬を叩いては彼女の反応を待つという動作を繰り返す。

「……………う、あ」

だが返ってくるのはうめき声だけだ。それも弱々しい、唇の隙間から漏れ出る程度の。

休まず責め立ててくる触手、逃れられない環境、蓄積され続ける快感。

それでもこの状況から逃れるためにロアの体が起こした本能的な最後の抵抗が、自身の意識の喪失だった。

限界まで追い込まれて、責め上げられて、ようやく至つた最後の手段。

計画性も何もない、どうしようもなくなってしまったが故の苦肉の策。

しかし事実として、その場しのぎだとしても彼女は触手の責め苦から逃れることができた。

もつとも。

それも一時しのぎに過ぎないものだったが。

トスリ、と小さい音が肉の空間で鳴った。

音の主は、一本の触手だった。

先ほどまでロアを撫でまわしていた無数の一本。

赤黒い肉の腕は、拘束していたロアの体に自身の先端を押し付けていた。

ロアの着ていた上着越しに細い先を押し付けるといいう、ロアの服に潜り込んで這いまわっていた時とは異なる動作。

状態確認の延長とさえ思える単純な接触。

その効果は極めて分かりやすく表れた。

「ふえあ

!?!

つつあ??

あ、ああ……

♥

あああああ

あああああああ!?!」

ロアの途切れていた意識が覚醒する。

快楽と疲労で朦朧としていた意識が鮮明になり、夢から現実へと強制的に引き戻される。

体が熱いのに冷たいような異常な感覚。

視界が鮮やかだ、自分の体臭が変わっていくのを感じる、心臓の鼓動がうるさいほどに鳴っている、空気の味がわかる、時間が流れるのが遅く感じる。

何より気持ちいい。

「ひゃぐつ?! なんへ?! これっ、はあっ………♥」

ナニかを打ち込まれたのだと本能的に理解する。

触手に塗り回された粘液などとは比較にならない。

粘液よりも即効性で、はるかに強力な効力。無理矢理に感覚を引き上げられて、滅茶苦茶に気持ちよくされるとんでもない劇薬だ。

四肢に巻き付く触手が気持ちいい。  
身に着けている服の衣擦れが気持ちいい。  
声で震える喉が気持ちいい。  
肺を出入りする空気が気持ちいい。  
苦しいのが気持ちいい。

どうしようもないこの状況が気持ちいい

「はへえええええええええつ、へうううううううう!?!」

身体を弓なりに反らしながら、目を見開いて口をパクパクと動かし。

快感を逃がそうと身体を暴れさせて、それを押さえつける触手の締め付けでさらに快樂の域地に押し上げられる。

静まり返っていた先ほどと違い、ガクガクと危うい反応を起こす口アを確認し、動きを止めていた触手群が鎌首を持ち上げる。

それは口アの体を這いまわるためではなく、彼女の体に先端を押し付けるための動作。

「……………っ! ぞれっ……………はぁ……………っ♥」

快感に溺れそうになりながら、視界の端にとらえた触手に口アが気付く。

赤黒い、光沢のある粘液をまとった肉々しい触手。

その先端に映る、細い極小の針。そこから伝うように垂れている濃密な紫色の液体。

毒針。

この状態を引き起こした元凶であることを直感で理解する。

弱々しく、けれど必死にその恐ろしい触手（モ）から距離を取ろうとして  
気付く。

そして目の前で蠢く触手群が、先端に隠した毒針をむき出しにして  
ゆっくりと距離を縮めていることに気付く。

「あ、は……………ひっ♥」

引き攣った笑みを浮かべながら口アは顔をゆっくりと横に振る。

四肢を動かす。  
動けない、逃げられない。  
視線を彷徨わせる。  
出口はない、逃げられない。  
快樂と絶望がロアの胸中を支配する。  
もう目の前まで、触手が近づいてくる。絶望が目に見える、地獄が正面から近づいてくる。

「め……ろ……」

単なる偶然か、それとも言葉が通じたのか、あるいはただの錯覚か。それでも触手が止まった気がして、最後の力を振り絞って。喉が震える快感をこらえてロアは必死に言葉を紡ぐ。

「ひやめ♥、ろおっ……い♥ひゅっ、もう、ひやめ、てくへ……！」

呂律が回らず、それでも必死に絞り出した言葉が暗闇に響く。

静寂。

祈るようなロアの叫びに対する触手の返答は、トスリという無慈悲な音だった。

「あ、ああ……、ひやら！ 嫌らあっ♥ やめ、あ、ひや、あああああああああああああ!!」

ゾクゾクと背筋を冷たいものが走り抜ける。  
トスリトスリと触手が殺到する、音が鳴るたびに、気持ちよさが跳ね上がっていく。

触手が体を這い始める。

ガクガクと撫で上げられる快感で身体が暴れ回る。

腰を震わせながら訳も分からずに絶叫をする。

捕らえる肉の空間がうねりながら悲鳴を虚しく呑み込んでいく。

彼女の地獄は、まだ始まったばかりだった。

\*\*\*

バイトを募集したのだが、すぐに集まるものでもない。

だから、待つてる間にスライムの育成研究でもしようかなと思ったのだ。

スライムを育てる方法はいくつか考えてあるのだが、出かける機会もないくらい忙しかったので、気分転換もかねて、街の外にいる野生のスライムの調査に向かったのだ。

いわゆるフィールドワークという奴である。

スライムは環境や食物で、性質が変化することがわかっている。

火山付近の高温地帯であれば熱耐性、凍土であれば凍結耐性といった具合に耐性を獲得し環境へ適応することが出来る。

金属を食べさせれば金属の性質を備えるメタルスライム、毒草を食べさせれば毒の性質を獲得したポイズンスライムといった具合に成長するのだ。

今回は近場の森なので、あらかじめばら撒いておいた手下のスライム達の成長観察。あと植物を食べるグリーンスライムを探して、食性や性質、どこに分布してるのかとか調べようというわけである。

まあ近場とはいえ、人の住む安全圏の外だ。



魔獣と出くわす可能性もある。  
自分の攻撃力のなさは、嫌というほどわかっていた。  
なので強い従魔士を護衛に雇って「外」に繰り出したわけである。

久しぶりの休日だったのもあって、かなりノリノリでスライム探しをしていたわけだが、そこで見つけたのだ。

彼女を。

黒い髪と獣耳が特徴的で、宝石のような紅い瞳。

なんかめつちやヌルヌルしてる液体まみれ、瀕死の動物のようにぴくぴくと痙攣を繰り返しているし、瞳は半開きで焦点が合っていないし、だらしなく開いた唇からは真っ赤な舌が力なくはみ出ているが、それを除けば美人と言って差し支えない感じの人だった。

いや、マジでなんだこれ。

意味が解らん過ぎて困ったので、護衛依頼を受けてくれた従魔士の指示を仰ぐことにした。

「ドランサーン！ …… あー、なんていうか美人が落ちてたんですけど、どうすればいいですか？」

「はあ!? おいおい、ウィルくんさあ……………。こんな森の中に美人なんているわけねーだろ！ …… つているじゃん！」

スライムを探すのをやめてこっちにやって来たAランク従魔士のドランさん（42歳）が、倒れている女性を見て目を丸くする。

が、何かに納得したように頷き始める。

「あー、これはヌシの犠牲者だな、しかも魔族。命に別状はないな。久しぶりに見たぜ。へえー、ほおーん」

「うーん、よくわからないので説明プリーズ」

「任せろボーイ」

ベテラン従魔士のドラランさん曰く、この僕が活動拠点としている街「ノスト」の周辺は、テンタクルと呼ばれる一匹の魔獣の縄張りになっており、それを従魔士達はヌシと呼んでいるとか。

その強さは規格外であり、ノストに暮らす従魔士全員で戦っても歯が立たないとかいうバケモノらしい。

想像以上に厄ネタだった。

テンタクルが本気出したら街滅びるじゃん。

「そうなんだよなあ。でも倒せないからしようがねえんだよな」

「それでいいんですかね……………」

「街の連中は諦め気味だぜ。俺が生まれた時からずっと放置してるし」

だが、テンタクルが縄張りに行っているために、他の強い魔獣がノストに近づかない、居ても捕食してくれるという利点もある。おかげで魔獣による被害もほとんどないので平和だとか。

昼間は洞窟で過ごししており、縄張りを徘徊するのは夜とわかってるので、そこだけ注意すれば問題はない。もし遭遇しても魔力が吸い取られる程度、死ぬことだけはないので、討伐対象として扱ってはいらない。

「でも、たまにノストの街を知らずに野宿した奴がああなるんだよな」

「そりゃ気の毒な話ですね」

「怪物と出くわして命があれば安いもんだろ、普通は死んでるぜ？」

「それはそうですね」

まあ人間、生きていれば安いか。

死人に口なし。死んだらどうにもならないのは、故郷が滅んだ時に十分に理解した。

まあ命に別条がないなら大変結構。

放置するのは気が引けるので街に搬送して差し上げよう。

命拾いした上に、安全な街まで移動できる。そう考えると確かにラッキーな話なのかもしれないなかった。

「ちなみに取り込まれたら、搾りカスになるまでエツチな方法で魔力を吸われるぞ。老若男女関係なく触手と媚毒で死ぬほど気持ちよくされるとよ」

「エロ漫画ですか？」

………  
前言撤回、気の毒な話だった。

「なんでも」

魔族は、人の成り損ないだ。

ごく稀に人の腹から生まれる、魔獣の特徴を容姿に備える異形の存在。

真つ当な人間から見れば、恐ろしい魔獣の血を持つ汚らわしい化物だ。

魔獣を恐れる世の中で、魔族が人々の中に溶け込めるわけもない。

暴力的な性格。

魔獣由来の人間離れした力を持ち。

災いを呼ぶ呪われた化け物。

それが魔族だと、言われている。

大きな都市であるほど、世間でのイメージは固まりきっていて。

魔族である自分にできる仕事も、そう多くはなかった。

後ろ暗い組織の用心棒、あるいは小競り合いをする紛争地域での傭

兵稼業。

気が付けばロクな血なまぐさい仕事しかしてこなかった上に、それが崇つて厄介事を抱えた、ただひたすらに面倒な存在になっていた。

だから逃げたのだ。

各都市を渡りながら、人の少ない辺境へと転々と移動した。

迫害と報復から逃げて逃げて、逃げ続けて。

逃げた先で、恐ろしい魔獣に捕まった。

抵抗も出来ず、一瞬で呑み込まれ、玩具のように弄ばれた。助けの来ない魔獣の体内で延々と、終わりの見えない生き地獄を味わいなが

ら、自分はここで終わるのだと思った。

同時にここで終われるのだとも思った。

疲れていたのだ。

生きること。

確かに魔獣に食われるのは恐ろしかったけれど、他者に否定され続けながら、生きるためだけに生きる、苦しいだけの日々には比べれば、幾分かはマシに感じたのだ。

だから抵抗は諦めた。

長い長い間、上も下も、前も後ろもわからない程に廻れ続けた。

魔力の多い人間が、魔獣に食われるというのは有名な話だ。魔力を奪われ切った人間が殺されるという話も。

だから自分の魔力に限界が来た時。

ようやく終わるのだと安堵のような感覚に意識を手放して

---

目を覚ますと、誰かが顔を覗き込んでいた。

暗い。

暗い瞳だった。

何かを諦めきったような、あるいは何かに絶望したかのような、この世のすべてを心底どうでもいいと思っっているような、達観した眼だ。

あの時の私は、冷静じゃなかったのだと思う。

敵に追われ続けていたこと。

見知らぬ場所にいたこと。

顔を覗き込めるほど、誰も近づけたことがなかった事。

なにより、自分のすべてを見透かすようなあの眼がどうしようもなく嫌だった。

だから私は

彼を殴ってしまった。

\*\*\*

なんか介抱していた人に起き抜け一発ぶん殴られたんだけど。

あの後、例の女の人を街に運んだのだ。

ドランさん曰く、塗れていた粘液は強力な媚薬だから、うかつに触れるとエライことになりかねないらしいので、自宅から使い魔のスライムを呼び出した。

ここ最近、上位クラスの魔獣が食べる様な最高級魔力餌だけを食べていたスライムは、ちょっととしたベッドサイズにまで成長していた。どうやらスライムは必要がないから大きくならないだけで、その気になればかなりのサイズに成長できるようなのだ。

タイムしている魔獣は、互いの場所が離れていても近くに呼び出すことが出来るので、自宅に放置していたスライムを呼び出し、問題なく運ぶことが出来た。

大きくなってもスライムの動くスピードは遅いままだったので、ゆっくり歩きながらだったが。

大きくなっても相棒の使い魔は、相変わらず無害なようだ。

魔族を病院に連れていくと嫌な顔をされるらしいので、「ウゝズ」で介抱していたのだが、調子はどうかと顔覗き込んだら錯乱した彼女にぶん殴られたわけである。

で、今はロアさんと机を挟んで向かい合っている状態だ。

ちなみに彼女の粘液塗れの服は洗濯中。

スライムに汚れと粘液を食べておくように言っているので、しばらくしたら綺麗になるだろう。

代わりにアルバイト用のメイド風の制服を着てもらっている。白黒カラーで特注のフリルマシマシで丈が短めの特注制服である。用意するための資金は惜しまなかった。

会心のデザインだが、アルバイトが入らないために置きっぱなしになっていたので丁度よかった。

「……………すまなかった」

「気にしなくていいですよ」

彼女が頭を下げるが僕はどうでもよかった。

クール系美人が自分の趣味全開のメイド服を着てくれているのである。申し訳なさそうにへたつと下がっている獣耳も加点ポイントだ。

別に顔が腫れたところで困ることはない。

せいぜいが近所の悪ガキ共に見られて爆笑される程度である。

ちなみに手当はロアさんにしてもらった。

美人なお姉さんからの暴力と手当。トータルで見ればプラス要素しかないので文句はなかった、むしろこっちがお礼をしたいレベルである。

だが、彼女の方はそうでもないらしい。

「その、謝罪と礼をしたい。何か私にできる事はないだろうか」

「謝罪はともかく、お礼ですか」

「ああ、私にできる事であればなんでもする」

ガタツ

え!?! なんでも!?!

なんでもって制限が無いってことですよね!?

善なる願いでも邪悪なる願いでも叶えてしまうというあの「なんでも」ですか!?

でも人は万能じゃないからできる範囲ってことだよなあ……………

……………ん?

え!?

美人なお姉さんに!? できる範囲のこと!?

じゃあ、どこまでがセーフでどこまでがアウトか教えてください!

と言いつつになったが、思いとどまる。

勢いよく立ち上がりかけた姿勢から、ソファにゆっくりと腰を下ろす。

「あー、ないですね、特にない」

「そう、か」

ふう、危ない危ない。思わずとんでもない言葉を口走るところだった。

危ない危ない。

「なんでも」をちらつかされて、人間関係を破滅させる者は多いと聞く。今回は咄嗟に回避できたが、一歩間違えれば僕もとんでもない醜態を晒すことになっただろう。

けど「礼をする必要はない」と言い切ってしまったのは、もったいなかったよね。

絶対千載一遇のチャンスだったじゃん。

せめて今日中止になったフィールドワークの手伝いくらいは頼んでも良かっただろ! 馬鹿!

あーあ、二度とこんなチャンスはやってこないだろうなあ、残念だなあ。僕は不幸な男だなあ

「本当に、何もないのか?」

セカンドチャンス到来



僕は幸運な男だった。

「アッ…… いやっ…… その！ スウツ、何か（↓）あつ（→）た気が（↓）するなあ（→）！！！」

「そうか」

落ち着け。

変な声が出てしまったが落ち着くんだ。

彼女にはお礼をする意思があり、僕にはお礼を受け取る意志がある。

なら、すでに読み合いは始まっている。

重要なのは如何にして相手の許容ラインを見切り、そして自身の要求を通すかだ。

フィールドワーク？ 糞くらえだ。

何でもしてくれるって言うなら、何でもしてもらおうじゃないか。

狙うは彼女の手下料理、歯磨き、ご飯あーんに耳掃除とか……… ギリギリ、運が良ければ、なんとか行けるか？

いや、大丈夫だ。多少レベルの高い要求でも通るはずだ。

彼女は僕に命を助けられたという明確な恩がある。そしてお礼がしたい。

しかし、所持品は魔獣テナクルのせいで紛失してしまっている。

真面目な話、彼女には金がないのだ。

金銭や物品によるお礼は難しいだろう。

そんなことは僕も彼女もわかっている。つまりこの状況から彼女は何かしらの労働という形で礼をしたいと言っていることが推察されるわけですね。

つまり僕のウキウキプランを要求できる可能性がある。

だが、これはあくまで推測。万が一があっては困る。

まずは相手の許容ラインを把握するため、ジャブ代わりの言葉を並べることにした。

「あー!!、最近忙しくて疲れが酷いんですよねー!! ちよつとした手伝いが欲しいっていうかー!! 生活のサポートが欲しいというかー! でもうん! 僕の口からはとても言えませぬね!」

——ちよつと不自然だったか?

心の焦りが出てしまったかもしれない。

誤魔化すために露骨に肩をおさえて、ダルそうに顔を顰める。

本当に疲れてそうなフリをする、ていうか本当に疲れてたわ。仕事めっちゃ忙しいねん。

割と本音だった。

大切なのは自分の要求を彼女に提案させることだ。

だって「耳かき歯磨きご飯あーんをしてください!」なんて、最初から自分の口で言うわけにはいかない。

だから、こちらとしては彼女の口から「何かお手伝いをしましょうか?」くらいの言質はほしいのだ。

言質取った瞬間「耳かき歯磨きご飯あーんをしてください!」って言おう。

こんな僕の要求は馬鹿げているだろうか?

否である。

スライムホールが売れに売れ、今の僕はちよつとしたお金持ちである。本気を出せば常識的な範囲内の商品なら、この世のモノはだいたいは手に入る。

なら金で買えないものを要求するべきだろう。

「耳かき歯磨きご飯あーん」は金では手に入らない。

たぶん。

というわけで隙さえあれば「耳かき歯磨きご飯あーんをしてください!」って言う。まあ全部の要求は通らないだろうが、うまく行けばご飯を作ってもらうくらいは頼めるだろう。

美人の手料理が食べられるならそれでいい。  
最悪ダメでも、もともとが降って湧いた幸運なので気にしない。  
夢っているのは手を伸ばしたことに価値があるのだ。

…………… どうだ？

チラッとロアさんを見る。

彼女は無言でこちらをじっと見つめると、静かに頷いた。

「わかった」

「ありがとうございますー！」

何が!?

なにがわかったんだ!?! どこまでがOKなんだ!?!

肩をおさえたままのポーズで、立ち上がる彼女を食い入るように見つめる。

言葉での読み合いは困難、なら動作から読み切れ、視線、表情、一挙手一投足から、彼女の許容ラインを———！

「……………ん」

彼女は制服の首元に手を掛けた。

「はっ？」

しゅるり、とりポンを襟から抜く音が響く。

襟元が開き、胸元と首筋があらわになる。

白と黒かで構成された衣服の下からのぞく健康的な肌の色に思考が停止する。

気が付けば机を乗り越え、座っているソファの隣に彼女がいた。

ギシツとソファが軋む。

ゆつくりとロアがしなだれかかってくる。

どこかやわらかい彼女の香りに包まれ、囁くような言葉が耳を震わ

せる。スラリとした足を上げ、馬乗りに近い、向かい合うような体勢で向かい合う。

息がかかるほどの距離。

静かに見つめ合う。

沈黙が支配する。

え？

何この雰囲気。

「……………あの？」

「すまない。私には自分の身体でしか、返せるものがない」

彼女の言葉で、ようやく気付く。

あ、これ、もしかしてエッチなお礼の展開ですか？

ふーん……………？

経験がないので断言はできないが、要求してることのハイエンドの状況に突入している気がする。助けた女性が自分から着衣を緩めて、しかも跨ってくる展開なんてエッチなことしか想像できない。

いやこれ、絶対エッチな展開だよ。だって大人用漫画で読んだことがあるもん。

だとしたらロアさん、ちよつと本気出し過ぎですね。

いきなりこれじゃ交渉もクソもねえよ。

好きなんか？　もしかして好感度ぶっ飛んでる感じ？　……………

なわけねーな！

初対面で好感度もクソもねえよ。

常識的に考えて嫌に決まってるだろう。

けど嫌ならそもそも行動に移さないで欲しいな。こういうのはやられる側もリアクションに困るんだぜ。

というわけで、いよいよ服を脱ぎ始めた彼女の手を掴んで止める。

「ちよ、何しようとしてるんですか」

「礼だ。私の身体を好きにしてくれ」

「すげえ堂々と言われた。」

「嫌ですよ、なんでそういう話になるんですか」

「だが他にできることは」

「そうまでして、礼をくれとは言ってませんよ」

「そんな捨て身みたいなお礼されても困る。」

「過ぎたレベルの謝礼を貰っても、申し訳ない気持ちになるだけだ。」

「もっと自分を大事にしてほしい。」

「そして僕はもっとうこう、良心が痛まない程度に、美味しい思いをさせしてほしい。」

「肉体的な礼は不要ということか？」

「僕は一般的で健全な青年なので、そういう事になりますね」

「一般的、なのか？」

「なんでそこ疑問形？」

「もしかして、エッチな要求するようなエロガツパに見えていたのだからか？」

「失礼な人だ。」

「やっべ、誤魔化そ。」

「当たり前じゃないですか！ 僕がよこしまな感情や下心でお礼を要求するような人間だと思いませんか？ 純度百パーセントの善人だと自負しているのに！ そう思われたなら心外ですね！ ええ！」

「そ、そうか」

「僕の熱弁にロアさんが頷く。」

「どうやら誤解は解けたようだった。」

「よかったよかった。」

「では、私は何をすればいい？ 貴方の要求を聞こう」

「……………」

「心の清い青年アピールをした手前、流石に添い寝耳かき手料理あーんしてくれみたいなのは言えないな。あと冷静になると、僕の要求も

まあまあストレスな発想だった。

しかもさつきまでは下心で頭がいっぱいだったので代替案も考えてない。

「どうかしたのか？」

「あつ、いや、なんだったっけなあー」

さつきエツチなお札をチラつかされたせいで、思考がそつちばかりに行ってしまう。

これだから下心で動く人間はよオ！

一番OKしてもらえそうな手料理でも要求するか？ いや、純度百パーセントの善人の発想ではないな。マジで困った。

あまり時間を掛けるとバレル。下心人間なのがバレル！

でも美味しい思いがしたい。

いいから何か言え、なんかあるだろ！

「……………耳かk、いや家事をしてほs、いや、そう、働いてもらえませんか？ アルバイトで」

妥協に妥協と妥協を重ねた結果。

純度百パーセントの善人である僕は、彼女をアルバイトとして雇用した。

## フオローミー

### 前略

いくつかのハプニングと誤解を乗り越え、僕はアルバイトを一人確保した。

「で魔力が切れかけてヤバくなったから、そいつは例のスライムを食べたわけよ。そしたら慌ててたせいで喉に詰めて死にかけてやんの！」

「お仲間に、うちの商品で命をかけないでくださいって伝えてもらえますか？」

「だっはっはっはっは！」

お礼騒動から数日が立った僕は、「ウゝズ」に来たドランさんと世間話をしていた。

Aランクの一流従魔士である彼とスライムの納品依頼しかこなさない万年Eランクの僕。本来なら話すどころか出会う機会すらないのだが、彼はスライムホールの愛用者だった。

なんかスライムホールの使用感や改良点の話をしている内に仲良くなっていた。

今日は人が少なく暇だったので厨房を抜け、ドランさんの武勇伝兼下らない話で盛り上がっていると、制服姿のロアさんがトレイをもつて現れる。

スラっとして高身長、クールな印象の彼女に可愛めの制服。なんとなくかギャップがいい、ありがとう。

接客業に慣れてないのか、まだまだ動きはぎこちないが、彼女なりに頑張ってくれているようだった。

「お待たせしました。『映え映えスライムゼリーパフェ』生クリームチョコレートツッピング」になる………ます」

「お？ おお、サンキューな」

「…………… 店長もお茶を」

どうやら気を利かせてくれたらしい。

そつと差し出されたティーカップを受け取って、彼女に礼を言う

「ありがとう、会計は僕がやっておくからロアさんは休憩してね」

「…………… 了解した」

店内に消える彼女を見送っていると、スライムゼリーを食べながらドラランさんが話し出す。

「ふーん、ロアだっけ？ マジで魔族を雇ったのな」

「ええまあ、お礼をしてくれるらしいのでアルバイトになつてもらいました」

ピタリと、ドラランさんのスプーンを動かす手が止まる。

「ウィル坊、魔族の評判って知ってるか？」

「まあ、それなりに」

「知ってたのに雇ったのか？」

「…………… そうですけど」

前々から良くない噂を聞いてはいたので調べてみたのだ。

が、身体に魔獣の特徴を持つとか、粗暴な性格の人間が多いとか、力が強くて超危険とか、呪われてるから災いを呼ぶとか。

魔族を厄介者扱いするには、どれも決め手に欠ける様な内容ばかりだったので、根拠のない集団差別的なアレだと判断したわけである。

呪いの下りとか絶対迷信でしょ。ロアさん粗暴そうにも見えないし。

ネットが通ってる時代によお！ メディアリテラシーのある若者が！ そんな情報に踊らされるわけないよなあ!?!

「判断材料するには、不十分な情報しかありませんでしたから」

まあアルバイトを頼んだ手前、「やっぱなし」とは言えなかつたので雇用に踏み切つたのだ。なんかヤバそうだったら頃合いを見てクビにするつもりだった。

自分でもまあ妥当な判断だったと思っっている。

だが



「あの情報、全部事実だぞ」

「……………冗談でしょ?」

「メデイアリテラシーは高い方だぜ」

笑って流そうとしたが、ドラランさんの目は笑っていない。

一瞬だけ、沈黙が降りた。

なぜだろう。

いつもは人のいい従魔士が、とても恐ろしく見えた。

「ネットで調べたら書いてただろ、「アイツらは人じゃない」とか」

「それは、流石に言いすぎでしょう」

言っではならないだろう、それは。

人じゃないなら、なんだというんだ。

「魔族として生まれた赤ん坊がどうなるか知ってるか?」

「……………虐待を受ける、とか」

僕の言葉に、ドラランさんは苦笑した。

「捨てられるのさ、その辺に」

恐ろしい魔獣の力を持つ人間、育ちきれば殺されるかもしれない。オマケに、そんなバケモノを飼っていれば周囲からは目の敵にされるに決まっているのだから、捨てるのが一番無難に決まっている。

「問題は、魔族は一人でも生きるだけの力があることだ」

彼は言う。

たとえ親がいなくとも、泥水で喉を潤し、虫や木の根を齧って空腹を満たし、赤子でも魔族は生き延びられる。

劣悪な成長の中で、親の顔を知らず、差別と迫害故に愛を知らず、ただ力だけがある。だが力があれば金は稼げる。

傭兵とは名ばかりの、安売りした命の値札を下げて暴力で命をすり減らせば、今日は生きられるのだ。

暴力的な性格にもなる。

周りの全てが敵なのだから。  
強くもなるだろう。

今まで力で全てをねじ伏せてきたのだから。  
災いだって起こるだろう。

血と暴力で築いた人間関係なんて、呪いとなんら変わ  
りない。

「お前の思ってる通り、ネットの情報なんて大半が当てにはならねえ  
がな。「社会が生んだ悲しき怪物」を語るなら、それなりに適当だろう  
ぜ」

「……………彼女もそうだとはい限らないじゃないですか」

「そりゃそうだろうよ。これは「魔族」の情報で、お前のアルバイトの  
情報じゃないからな」

だがな、と陽気な従魔士は続ける。

「お前の言葉より、世間は魔族の情報を取るぜ。ほら」

今だって客が来てないだろ？

昼過ぎだというのに静まり返っている「ウゝズ」には、彼の声がよ  
く響いた。

いつもはカフェで談笑する主婦も、おやつを食べに来る近所の子供  
も、誰一人としていなかった。

まるで避けられているかのようにだった。

まるでロアさんを避けているかのようにだった。

嫌な静けさだった。

「……………なんてな」

「……………は？」

「田舎のノスト周辺じゃ魔獣に襲われるなんて日常茶飯事、魔族なん  
て言われてもお前みたいにピンとこない奴の方が多い。今は様子見  
だ、ウィル坊とも悪くない付き合いしてるし、客もすぐに戻るだろ」

いつの間にかスライムゼリーを完食し、ドランさんがスプーンを置く。

さつきまでの張り詰めたような雰囲気は嘘のようだった。

少し、脱力する。

「じゃあ、マジで何しに来たんですか」

「頼まれたんだよ、レイシアちゃんによ。いろいろ心配してたぜ」

「ああ、あの娘ですか」

従魔士ギルドの職員に同い年の人がいるのだ。　かわいいけど怖

い女の子だ。

「そっけねえな、もっと他に反応あるだろ」

「たまに出会って話す程度ですから………、怒ると怖いし」

「ぼつかオメエ、そこがいいんだろ」

代金の硬貨をおいてドランさんが立ち上がる。

「今の世の中、平和を謳っちゃいるが有りや嘘だ。陰謀、復讐、憎悪、狂気、争いの種はどこでもある。アルバイトにその気はなくても、トラブルの方から来ることもあるから気をつけな」

「お前は人が良すぎるからなー」と最後に言うと、ドランさんは去っていった。

結局、何も言い返せなかった。

「年長者からのアドバイス、だよな」

なんとというか、なにか納得がいかなかったが、仕方がないので食器を片付ける。

皿を洗って、テーブルを拭き、床にスライムをぶち撒けるように召喚して掃除させる。

汚れはスライムが食べてくれる。

「……………店長」

「ああ、ロアさん。どうかしました？」

モップを持っているので、どうやら手伝ってくれるようだ。

でも正直スライムたちに任せられた方が綺麗になるから必要ないのだが。

「すまなかった、私はこの店の役に立っていない」

「……………どうしてそう思うんです？」

彼女が視線を彷徨わせる。

「私は、戦いしかしたことがない。他は、何もできない」

「……………」

「店で働くのは、初めてだ。住み込みで、報酬までくれて、店長には感謝している。早く仕事ができるように、頑張ろうと思った」

けど、と苦しそうに彼女は続ける。

「店に、客が来ていないのは私のせいだ」

——ああ、なるほど。

彼女は人間以上に感覚が鋭い。

だからドランさんとの会話が聞こえていたのだろう。

あるいはそれすら知っていてドランさんは、魔族の話を切り出したのかもしれない。

「礼をすると言ったのに、私は迷惑しかかけていない」

「……………」

めっちゃ面倒臭いことするじゃん、あの人。

注意しに来たけど、フォロー入れるのは僕がやれっか。

別に人付き合い得意じゃないんだが、なんなら下手くそな方なんですけど。

……………

だが、看板娘（暫定）が自信を失ってるなら、店長が支えねばなるまい。

「ロアさん、接客で一番大事なことってわかります？」

「……………わからない」

「それは笑顔です」

「そう、なのか？」

「はい、笑顔を見ると悪い気分はしないでしょう？」  
「わからねえ。」

笑顔の原型は威嚇の表情とか聞いたことがある気もする。接客の極意なんて知らん、絶対他に大事なことがあるよ。

だが会話は雰囲気、とにかくそれっぽい話で押し通すことにする。

「ほら、ロアさんは笑顔が素敵です」

「……………笑顔、しただろうか？」

「しました、見ました」

見てないが、美人が笑顔とか最強だろ。たぶん。

つまり彼女の笑顔が素敵なのは間違っていない。見たことはないが。

「最初からすべてできるひとなんていません。まずは笑顔です。他は後からついてきます」

「だが、客は……………」

「客もロアさんが笑顔になれば自然と来ます！ 僕には見える！ あなたの笑顔で店が繁盛する未来が！」

そもそも「ウーズ」の主力はスライムホールなので、カフェ目当ての客が来なくても問題がない。

ていうか仕事が無くて楽なので、この状況がしばらく続いてくれて一向に構わない。

「つまり、ロアさんは自分に自信を持っていい。貴方はとても素敵です」

はい、ここで会心の微笑み！

失敗！

ニチャついた笑みになってしまった。だって笑顔なんてまともにやったことねーもんよー、引き攣るんだわ顔面筋が。別にスマイルなくても接客ぐらいできるじゃん……………

けれど

「……………ふふ」

ふわりとした、やわらかな微笑みだった。

いつのまにか、心底嬉しそうな、世界が色づくような笑みが僕の視界を奪っていた。

見惚れていると、次の瞬間には真顔に戻っていた。

「素敵に、笑えるだろうか」

「大丈夫ですよ」

今みたいに笑えばいいとは、言わなかった。

今のはきつと、彼女の心の笑みだ。

アレを商売に使えという気にはなれなかった。

「ありがとう、期待に応えられるように、もう少しだけ待っていて欲しい」

「そんなに急がなくても大丈夫ですよ、ロアさん」

彼女がこちらを見る。

「どうしました?」

「お願いがある」

「なんですか?」

なんだろ。

聞くつもりはあるけど、あまり難しいのはやめて欲しい。

賃金を増やすとかなら、全然かまわないが。

金はあるし。

「……………ロアだ」

「え?」

「さん」は要らない。ロア、と呼んでくれ」

えー、一番ハードル高いやつじゃん。

## 格闘訓練？

ロアの視線が攻撃対象を、捕捉する。

瞬間、彼女の身体は歓喜した。

脱力、前傾、踏み込み、腰の捻転、肩の旋回、腕の撓り。それらを一息で行い接近を成す。

幾度とない闘争で染みついた、一糸乱れぬ肉体の連動。

身体はすでに引き絞られている。

予備動作プレモーションは必要ない。そんなものは移動と同時に終えている。

一切の無駄をそぎ落とした、よどみのない動き。

研ぎ澄ました刃のような、ある種の機能美すら感じさせる動作。

攻撃の摂理に従い、動作は力へ、力は敵へ。

即ち

「ぶっ！」

ロアの拳は僕の顔を、正確無比に撃ち抜いた。

\*\*\*

「あれ」

思い出したかのように起き上がる。

どうやら木の下で眠っていたようだった。いったい何が起こったんだ。

「起きたー！」

「しぬなー！ きずはあさいぞー！」

「えいせいへーい！」

見れば近所の子供たちが、僕を覗き込んでいた。

「うーん、なんか綺麗な川の向こうで両親が手を振ってたんですけど。なにが起こったんです?」

「ウイルがロアねーちゃん」と

「タイムン始めて」

「一撃で沈められた」

「…………… ああ、そうだった」

だんだん思い出してきた。

そうだ、ロアさんが戦闘経験豊富って聞いたから、頼み込んで組手の相手をしてもらったのだった。

街の広場で。

「手加減なしで頼む」なんて言ったのがいけなかった。最近読んだ格闘漫画やら体術入門書で強くなった気がしていたのだが、やはり気のせいだったようだ。

頬がクソ痛てえ。

「これは恥ずかしい」

「だっさ」

「草超えて森超えてユグドラシル」

「心配かけたロアねーちゃんに謝ってほしい……………、謝れ、謝れよ！」

「あっ」

僕を一撃で沈めたストライカーを探すと、座り込んでしょぼんとしているロアさんがいた。

「すまなかった、店長……………」

「いや、僕が悪いんで」

「そうだぞー、ロアねーちゃんは悪くないぞ」

「へボへボなのが悪い」

「みのほどを、ね」

悪ガキたちも言いたい放題だが、何も言えねえ。

自信ありげに構えたくせに、無抵抗でぶん殴られるんだもん。そ



りやビツクリするよな。

咄嗟に緩めてくれたらしいが、それでも意識が飛ぶ威力が出るのヤバくない？

これで魔力で身体活性されてたら、誇張抜きで前が見えねえになっていた可能性まである。

ちなみに身体活性は簡単なので僕でも出来るのだが、魔力量がスライム級なので一秒未満しか持続できない。

短すぎんよー。

「その、もう少し寝ていなくても大丈夫か？ 私の膝を使ってくれ」  
ロアさんが自分の膝を、ポンポンと叩く。

……………ん？

ん？

「もしかしてロアさんの膝で寝てました？」

「……………？ そうだな」

へえ、気絶してる間は膝枕してもらってたのかー。

最高じゃん。

「…………… あっ、ちよーっと、ふらつくので失礼しますね」

「ああ」

「しばらくしたら良くなるんで」

「ああ」

許可が出たので、極めて自然にゴロンと横になる。

今回のロアさんの服装はシャツにジャケット、そしてハーフパンツというラフな姿だ。なぜ服装を説明したかという点、特に理由はない。

はあ、柔らかか。なんか温かいし、良い匂いもする。

「なんてしあわせそうな顔してやがる！」

「はよしゆぎよーしろー！」



「普通だ」

「普通ですか」

ロアさんの言葉を復唱する。

「クソ雑魚ナメクジくらいは覚悟してたんですけど」

「クソ雑魚というほどでもない。私の攻撃に目をそらさないし、動きも悪くないと思う」

「あの子供に喧嘩で負けるんですけど」

「……………アレは、魔力が無いせいだろう。動きが多少良くても、力で負けていれば押し切られる」

身体活性は子供でも使える技術だ。

「というか、体内を魔力が巡っているだけで身体は活性化するので技術ですらないかもしれない。」

「じゃあ、やっぱり体術とか覚えても無駄ですかね」

子供に力負けするのでは意味がなさそうだ。

「そうでもない。戦場は、生死を分ける瞬間がある。そこで自分を助けるのは、身につけた技術だけだ」

「生死を分ける瞬間」

「武器がなくとも戦えるというのは強みだ。身を守るための受け身も覚えておいて損はない」

相手に勝つのではなく、自分が生き残るための技術。

僕が身につけるべき技術は、ソレからだと言った。

「なので、受け身の練習をしろらう」

「なるほど。ちなみにどんな練習なんです?」

「受け身を取ればいい。私がお前を投げたり転がし続ける」

シンプルだった。

案外簡単かもしれない。

「シンプルですね」

「どんな状況でも受け身を取れるようになってもらおう」

「……………ちなみにいつまで?」

「どのくらいで終わるのかなーと思ったので、ロアさんに尋ねてみる。」

彼女が一瞬きよんとして首を傾げる

「出来るまで」

彼女は結構厳しかった。

その日は街の広場で宙を舞う「ウゝズ」の店長の姿が目撃された。  
朝から延々と投げ続けられ、僕がようやく彼女が納得するレベルの受け身を取れるようになったのは、日が沈んでボロ雑巾みたいになつてからだった。

## 従魔士ギルド

エルンスト王国の辺境に位置する小さな安全圏、それが辺境街ノストだ。

人口の集中する安全圏——つまり主要都市から離れている街はガスや水道、電気を通せないために基本的に不便な生活をするようになる。

が、例の「触手獣」<sup>テンタクル</sup>の縄張りであるために魔獣の脅威が少なく、辺境でありながらインフラがそれなりに発達しているのがノストという街の良いところだ。

本来嫌われ者の従魔士<sup>テイマー</sup>も、貴重な戦力として歓迎される点も大きい。

多少の不便はあるが、従魔士にとって住みやすい環境であることは間違いない。

さて、今日はそんなノストに設置されている従魔士ギルドに用事があった。

従魔士としてのライセンスの発行、依頼の斡旋、従魔士の情報管理、安全圏周辺の環境維持、大災害<sup>イベント</sup>の対応等、役割は多いが基本的には従魔士専用職業斡旋所だ。

受注は掲示板に依頼用紙を張り出すアナログ形式なので、基本的にフリーな従魔士達のたまり場になっている。

重い扉を開けてギルド内に入る。

ぼへーっとテーブルでくつろぐ従魔士に一人が、こっちに気付いて立ち上がる。

アフロヘアアの天辺に一本の苗木を生やした従魔士は、パアツと笑顔になると駆け寄ってくる。

「あっ！ ウイル君じゃん！ おひさー！」

「おひさ、ウツギ」

「最近ギルド来ねーから心配してたんだぜ！ ほら、フラワーちゃん

もそう言ってる！」

ズボオ、と頭に乗せていた樹木魔トレントを引き抜いて見せてくれるが、手足のような根をばたつかせているだけなので反応に困る。

「それ怖いからやめなよウツギー」

遅れて、後ろからノホホンとした恰幅のいい従魔士がやってくる。

「別に怖くねえだろブッチー！」

「あ、うちの母ちゃんが、こんどスライム売ってくれってさー、ゼリー用を」

「ん、用意しとく」

「無視すんなよー！」

ウツギとブチャル。

ノスト生まれノスト育ちの彼らは、従魔士たちの中でも数少ない同年代の仲間だった。

ノストに来て日が浅い僕に気安く接してくれた、気の良い奴らである。

「ああ!? そういやウイル君さあ! なんかめっちゃ美人のアルバイト来たべ?」

「まあね」

「ちよつと恥ずかしくてホール買いに行きづらいんだけど」

「それはマジでゴメン」

気が付けばギルド内の他の従魔士たちも集まって頷いていた。アంతらも気になるんかい。

なにか敷居を下げる工夫したほうが良いかもしれない。

「ちよつと、騒がしいよー!」

何かいい方法はないかと首をひねっていると、頬をつねられた。

「痛ひゃい!?!」

見ればノストに住む最後の同年代。

ギルドの受付員のレイシアがいた。

綺麗な金髪にギルドの制服姿、丁寧な対応と明るい笑顔が評判のギルド職員だったが、本気で怒るととても怖いことで有名だった。

以前、ドランさんが酔っぱらってギルド内でゲロをぶち撒けたこと

があった。

当然怒ったレイシアに説教をされ、泣きながら自分のゲロを片づけるノスト最強の漢を見て以来、彼女を怒らせることは避けねばならないと僕たちは学んだ。

ギロリと彼女が睨む。

「つべー、じゃあなウイルっちー！」

「ちよ」

「アツ!! 急にお腹が減った! 帰る!」

「仕事するかー」「今日も社会貢献、させてもらうぜ?」「唐突に薬草採取したくなってきた」

あつという間にギルド内に人がいなくなった。

アイツら、僕を置いて逃げやがった。信じらんねえ。

「…………… もう」

どんなお叱りを受けるのだろうか。

自分の処遇を憂いていると、レイシアがつねっていた頬を放す。

「あれ、怒んないの?」

「こんなので怒ってたらキリがないもの…………… 叱ってほしい?」

「叱ってほしくないです」

流石に18歳にもなって、同年代の女の子に泣かされたくはなかった。

「ならよし。何か用事があるんでしょ? こっちにきて」

受付カウンターに回って手招きする彼女に従い、向かい側の席に着く。

パチンと彼女が指を鳴らすと、小さな緑の妖鳥がギルドの奥から紙とペンを持って現れる。

彼女の従魔だ。

「ありがとね」

依頼用紙とペンを受け取り、アリシアさんが礼を言うと、パイと鳴いてギルドに帰っていく。

見送り終わると、必要事項をスラスラと記入しはじめる。

田舎の安全圏だと、生活に不要な為に教養程度にしか勉強をしない

人間も多い。だがレイシアは相当勉強を頑張ったようで、16歳でその時には国際機関である従魔士ギルド職員になっていた。

僕がノストに訪れた時期とほとんど同じであり、彼女との従魔士としての付き合いはそれなりになる。

勉強熱心なしっかり者、それが僕の持つレイシアのイメージだ。

書き終えるのを待っていると、レイシアが口を開く。

「そういえば、アルバイトを雇ったって聞いたわ」

「あー、魔族の人をね。ようやく手伝いを雇えたから助かってるよ」

「ふーん……………、そうなんだ」

興味のなさそうな、素気のない返事だ。

まあウツギやブチャルと違い、彼女はギルドでしか関わらないし。こんなものだろう。

従魔士になった頃は、お世話になりっぱなしだったが、「ウゝズ」を開いてからは随分と関わる機会も減った。

「あ」

そう言えばドラランさんが、レイシアさんが心配していたと言っていた。スライムしか売らない雑魚従魔士を心配するとか、ほんとかよと思わないでもないが。

まあ彼女くらいになると魔族にも詳しいのだろう。

面倒見の良い彼女のことだし、結構心配をかけたのかもしれない。

話すにはちようどいいタイミングなので、ロアさんはいい人であることをアピールしておこう。

「雇ってる人は真面目だし、仕事の呑み込みはやいし、優しいし、笑顔がかわいいし、しっかり者だし、細かい気配りも出来るし、悪い人じゃないと思いますよ」

「…………… つー！　そこまで、ウィルが褒めるなんて珍しいね」

「まあ、事実だし。一緒に働けばいろいろ見えてくるもんだよ」

嘘は言っていない。

正直、黒髪獣耳クール美人お姉さんっただけで百点満点だし。他の評価は些細なことだ。

「…………… いいなあ」



「え？」

「な、なんでもない。で、何の用事で来たの？」

「商品の運搬依頼を出したいんですよ」

「ウゝズ」の資金源は、何を隠そう「スライムホール」である。

どこでも手軽に一発スッキリできる従魔士向けの性処理グッズとは言っているが、基本的に男性全般に人気のある商品だ。

オナホ界限のオンリーワンにしてナンバーワン、出せば出すだけ売れる。

「スライムホール」を売り始めてかれこれ二年は経過しており、使用感の良さと客の口コミで「スライムホール」はそれなりの知名度を持っていた。

現在はノストだけでなく、他の安全圏の生活用品店と提携して販売をしているのだ。

その商品の運搬を従魔士に頼もうというわけである。

飛行能力のある魔獣を従える従魔士もいるし、人数を雇えば段ボール数十個の運搬もそう難しいことではない。

「最初はおかしくなっちゃったのかと思ったけど、結構人気なんだね」「あー」

売り出し初めの頃、ギルドにスペースを借りて販売していたら「正気かコイツ」って顔されたっけ。どんな商品か聞いてきたので、説明したらレイシアが赤面していた頃が懐かしい。

三大欲求の一つである性欲を、疑似的にでも満たせるのだから、まあ需要はあるのだろう。

「相手がいれば必要ないだろうけど。独り身の人には需要はあると思うね」

「そうなの？」

「相手のいない人は持っていて損はない商品。僕はそう思う」

以前、ホールを使うとか情けないとか言われたこともあったが、合意を得ないで相手を襲う輩がいることを考えれば、わりと紳士的なアイテムだと思う。

しかし、彼女が「スライムホール」を自分から話題に出すとは意外

だった。

以前は使用方法を聞いただけで顔を赤くしていたのに、なにか心境の変化でもあったのだろうか。

「……………じゃあ、ウイルスは使うの？」

「え？」

なんかとんでもねえこと聞かれた気がした。

……………まあ聞き間違いだろ。

「だから、ウイルスは使うの？ ソレ」

「……………」

できれば聞き違いであって欲しかった。

何で聞いた？ 何で聞いた!?

なに興味なさそうなフリして依頼用紙見てるんですかね。世間話で流せるレベルじゃないんですけど。あと目がめっちゃ泳いでるの丸わかりだぞ。

じつとレイシアを見てみる。

だが耳を赤くして俯く彼女が、この状況を動かすつもりはなさそうだった。

完全に返事待ち。

「……………あ、虫だ」

なんかハエを目で追ってるフリをして辺りを見回すが周囲には誰もいない。完全に二人きりの状況だった。まあ少子高齢化と戦う辺境街の一つなので、昼間はこんなものだ。

一旦、落ち着こう。

状況を整理すると、彼女は僕がオナホを使っているかを聞きたがっているらしい。だが、彼女の言葉をそのまま受け取るのは愚かと言わざるを得ないだろう。

果たして知りたいだろうか？ 冴えない男がオナホ使ってるかど

うか。

僕は知りたくない。

知らないまま人生を終えたい。

『という事はその言葉以上の何かを読み取る必要があるという事だ。今回、気が付いたのは彼女がスライムホールに興味を示していたという事である。』

先ほどの会話を振り返る。

『相手がいれば必要ないだろうけど。独り身の人には需要があると思うね』

『そうなの?』

『相手のいない人は持っていて損はない商品。僕はそう思う』

『……………』

じゃあ、と彼女は言った。

僕の言葉を踏まえると「相手のいない人間はグッズを使うが、お前は使うのか?」となる。その言葉の返答によって把握できるのは僕の「オナホの使用の有無」、「彼女の有無」。

なら彼女は「僕に彼女がいるのか?」と暗に問うているのだろうか?

—— 否である。

彼女の有無を知るためだけに、まあまあセンシティブな商品であるスライムホールを話題に出すだろうか?

いやいや。

彼女は国家レベルでの業務に携わる優秀な人間の一人である。

普通に「彼女いる?」って聞けばいい筈の話を、そんな遠回しかつ無駄の多い方法をとるなんてありえない。万が一そうだとしても、どんだけ慌ててるんだって話だ。そんな恋する少女じゃあるまいし、恋は盲目とはいうが、恋愛漫画の乙女ですらもう少し冷静だ。

という事は聞きたいのは「当然オナホの使用の有無」。

そして、これが会話であることを踏まえればあとは簡単だ。

会話とは続けるもの、発展させるものだ。この話題には発展する先があり、おそらく彼女には持って行きたい会話の方向がある。

なら、この話題の中心はオナニーグッズである。そして今までソレに恥ずかしがっていた彼女が、今回はソレに興味を示している。

なるほど。

「わかったよ」

完全に理解した。

ならば彼女の勇氣に僕も応えねばなるまい。

僕は背筋を伸ばし、彼女をしつかりと見据える。

すると何かを察したのか彼女が俯いていた顔を上げる。

視線が合う。

僕は穏やかに彼女に告げた。

「今度、女性用のグッズを作ってくるよ。内緒で」

彼女はつまり「僕？ 使ってるけど、お前はレイシア？」と言わせたかったのだ。

そこから僕に専用のスライムグッズを作ってもらえるように話を持っていくつもりだったのだろう。

彼女がいるかどうかを知りたいだけなら、普通に聞けばいいだけだし。

「迷宮入りの事件を説いた気分だった。」

清々しい気分でレイシアさんを見る。

彼女は驚いたように目を見開いていた、しばらくして我に返り、次に頬を赤らめて

「だ、誰もそんな話してない！」

容赦のないビンタが、僕の顔面に突き刺さった。

僕はぶっ飛びながら、じゃあ何の話だったんだよと思った。

## 鬼

「はい、依頼受注しました。あとで張り出しておくね」

「…………… お願いしまーす」

レイシアに礼を言う。

ビンタを一発貰うというハプニングに見舞われたが、配達依頼の発注という目的を達成することが出来た。

結局、彼女が何を言いたかったのかは不明なままだ。言いたくないのならそれもいいだろう。

聞き直して慌てだす彼女は見ていて面白いのだが、あんまりやり過ぎると怒られるので自重する。

「でも、元気そうで良かった。最近はギルドに来なかったし」

「店が忙しかったからね」

ギルドに配達依頼を出しに行くのは、スライムホールを買ってくれる新規の店が見つかった時ぐらいだ。

討伐依頼や護衛依頼、従魔士らしい依頼を請けることもない。

弱いことは知られているので責める人間もいなかった。

安定の最弱スライムマスター。

最近、スライムの強さに少し光明が見えてきた気もするが、おいおい確かめていきたいところだ。

「あ、あのね、ウイル。今週末なんだけど、暇だったりしないかな？」

「週末？ うーん……………」

帰ろうとすると、どこか不安そうにレイシアが話を切り出す。

少し、思案する。

今週はスライムの生態調査を兼ねて、街はずれの森でフィールドワークでもと思っていた。

が、そろそろ調べる意味もなくなってきた。

スライムは餌と環境でその性質を変化させるのだが、なにせ特殊な環境でもない辺境街なので普通のスライムしかいない。たまたに薬草を食べるグリーンスライムが見つかる程度。

ロアさんをアルバイトに雇って以降、何度か森の調査は行っていた

がもう必要はなさそうだった。

結論、暇。

「暇かな」

「っ！ なら、一緒に買い物でも行かない？ 帰りにご飯でも食べた  
りして、さ」

「買い物かあ、いいよ」

何かしら気になる物があるのだろう。

荷物持ちならお安い御用。

彼女にはノストに来た時から、随分と助けられているのだし、こ  
らで恩を返すのも悪くなさそうだった。

この程度で返せる恩ではないけれど、返すつもりになるくらいは良  
いだろう。

「じゃあ、また連絡するからよろしく」

「う、うん！ また「ウゝズ」のゼリー食べに行くね！」

荷物持ちを確保できたのが嬉しかったのだろう。

大きく手を振るレイシアに見送られながらギルドを出る。

のんびりとした足取りで、「ウゝズ」に向かいながら考える。

それにしても、もう二年である。

レイシアに出会って思い出したが、ノストに来てからそんなに時間  
が経っていたことに気が付いた。

最初はお金に困っていたけれど、スライムを売って、お金を稼いで、  
店を持った。

ノストは居心地がよかったし、店も繁盛して忙しかったが、悪いも  
のではなかった。

ロアさんというアルバイトも入った。

一時期、魔族という事で客足は離れていたけれど、それも最近に  
なって戻って来た。

スライムの強さは………、まあそれなりだ。  
育成の用途は立っている。じっくり、腰を据えて向かい合えばいい  
だろう。

いい人生を、歩んでいる。

足りないけれど、満ちている。

足りないなりに、満たされている。

嗚呼。

なんとも平和な日常だ。

なんとも穏やかな毎日だ。

本当に。

……… 本当に？

過去を、思い出す。

燃え盛る街、満ちる悲鳴、崩壊する日常、大気を汚す鉄錆の匂い、な  
により鮮やかな血色のキャンバス。

「………」

あれほどの地獄を見て、あれほどの死を経験して、あれだけの罪を  
重ねて、あれだけの苦しみを眺めて、それでもなおマシな人生を歩ん  
でいる。

まるで何かの間違いだ。

質の悪い冗談だ。

お前のどこにそれだけの価値がある？

そもそも皆が死んでおきながら、お前は何故のうのうと

「おい」

思考が、途切れた。

視線に気付く。

道端にある出店で、パンをかじっている男がいた。



黒い短髪に赤い瞳、精悍な顔立ち。漆黒を基調とした戦闘衣と捻子くれた様な長刀を持つ容姿。そして、額には二本の角が伸びている。魔族だ。

異様な雰囲気。

目が合う。

僕に話しかけているのだと気が付いた。

「……………どうか、しましたか？」

外に出されたテーブル席に、ドカリと座り込んでいる男に返事をする。

「どうしたも何も、心配して声をかけただけさ」

顔色悪いぜ、と魔族の男は言った。

そんなに、酷い顔をしていただろうか。

「ま、座れよ」

「……………いえ、大事な予定があるので」

なんとなく、嫌だと思った。

「ウゝズ」に向かう予定もある。

ロアさんも、そろそろ仕事には慣れて来たけれど、それでもあまり長い時間を空けたくはなかった。

僕の言葉に男が笑い声をあげる。

嫌な笑い方だった。

なんというか、人を食ったような笑い方だ。

「大事な予定に、酷い顔で向かうのか？　どんな用事かは知らんがな。誰かと会うなら、心配されるだろうよ」

「……………」

「昼飯時だ、腹になんか入れておけ。それだけで人間、随分マシになる」

腕時計を見ると丁度、昼に差し掛かったところだった。

僅かに悩む。

面白がるようにして、「なら、こうしよう」と男は話し続ける。

「俺はこの街に来たところだな、右も左もわからない。休憩がてら街の話をしてくれるなら、昼食代を俺が出そうじゃないか」

「…………… 遠慮しときます」

「なぜだ？ 休める上にタダ飯まで食える。悪い話じゃないだろう」

「悪い話じゃないからですよ。他人の世話になるのはあまり好きじゃないんです」

「なるほどね、お人好しにありがちな発想だ」

「別に、単に借りを作りたくないってだけでですよ」

「ふーん、難儀な性格だな」

「なら、と男が続ける。」

「座れ。嫌だつてんなら、お前の膝を逆方向に畳んで無理矢理座らせてやる」

男は笑っている。

だが、目は笑っていないかった。

じわりと、嫌な汗が滲む。

「それは、随分と強引ですね」

「そっちの方が好みなんだろう？ これなら借りもクソもない」

滅茶苦茶な話だった。

倫理も論理も破綻している。

こちらの都合なんて考えちゃいない。

だが、断れば本当に「座らせる」気だろう。

それを行なえる精神と、それを実現できるだけの実力が男にはあるのだと、直感で感じ取れる。

暴力的な性格と、それを支える強力な性能<sup>スペック</sup>。

それが、魔族。

「…………… なら、少しだけ」

選択肢がないなら仕方ない。

騒ぎも進んで起こしたくはない。

魔族の男と向かいの席に着く。

「まずは自己紹介から始めようか——俺はグレン、ただのグレンだ。姓はない。傭兵で飯を食っている」

「えー、ウイル アーネスト。飲食店で働いている従魔士です」

「…………… 従魔士か、そうは見えないが」

「まあ万年Eランクですからね。ほとんど副業みたいなもんですよ」  
意味があるのかわからない会話だ。

嫌な感じがするし、さっさと話しを終わらせて帰りたい。

「で、何が聞きたいんですか？ 二年前にノストに来たところなので、あまり教えられないことはないですよ？」

「ああ、そいつは問題ない。聞きたいのは最近の話だ」

グレンと名乗った男が、懐から何かを取り出す。

古びた一枚の写真だった。

映っているのは黒髪と獣耳、魔族特有の赤い瞳の女性。

——  
ロアさんだ。

「ロアという傭兵だ。最近行方知れずになったらしくてな。探し回ってる」

「……………」

「ここに来てたとしたら最近の筈だ。何か知らないか？」

写真をじっと眺める。

遠くから隠し撮りしたような角度。

髪型と服装、あとは雰囲気も違っているが、確かに「ウーズ」で働いている彼女だった。

「美人な方ですね。恋人か何かですか？」

「いや？ 面を合わせたことは何回かあるがな。基本的に赤の他人だ」

「じゃあ、何で探すんです？」

「最後にコイツを雇った組織に依頼されたからだ。本来なら人探しなんて面倒な依頼は蹴ってやるんだが—— 『幻狼』のロアと

聞いて請け負っちゃった」

—— 『幻狼』。

聞きなれない呼び名だ。

だが、ロアという名前は知っている。

「有名な方なんですか？」

僕のとぼけた質問にグレンが笑う。

「おまえ、『大戦』は覚えてるか？」

「それは……………、知ってますけど」

知っているに決まっている。

知らないわけがない。

十年前に終わった戦争。

魔王と呼ばれた男が引き起こした、事実上の世界大戦。

戦争が終結するまでの間、世界中を混乱の渦に叩き落とし、いくつもの国を滅ぼし、人類の終りを間違ひなく加速させた最悪の要因。

「その魔王陣営の最高戦力たる四天王の一人……………って噂の女だ」

「噂ですか」

「……………まあ、噂だな」

急に嘘くさくなったな。

まあ当時から、魔王に関する情報は厳しく規制が成されていた。

四天王がいることまではわかってても、それが誰かまではわからないのだろう。

僕の表情を見て察したのか、グレンが頭を搔く。

「まあ、奴が魔王陣営に所属していたのは間違ひない。あの壮絶極まる大戦で魔王軍の一人として戦い、今もお生きている」

幾多の死線を超え、幾多の屍を重ねた魔の軍勢。10年前に滅んでからも残る恐怖の象徴。

それだけで合う価値はあると男は言った。

「でだ、お前、『幻狼』を知ってるだろう？ アイツの匂いがする」  
じつと、覗き込むような視線。

匂い。

魔族故の感覚の鋭さか、あるいは写真を見た時の僕の反応か。

どちらにせよ、彼女と関りがあることを感づかれていたようだった。

隠すのは無駄に思えるし、一番無難な方法を選ぼう。  
慎重に口を開く。

『幻狼』っていうのは初耳ですけどね。ええ、写真の人は知ってますよ」

「教えてくれよ」

「確か、小さな店でアルバイトしてるんですよ。魔族の人なんて珍しいんで、ここらじゃ有名ですよ」

へえ、とグレンが驚く。

「魔族を雇うなんて変人だな、その店長は」

「ええ、何考えてるのかわからない上に、愚劣で吐き気を催すクズというか、まあ情緒の安定しない変な人間ですよ」

「…………… お前、そいつに恨みでもあるのか？」

「嫌いなんですよね。いつも失敗ばかりで、見てると心底イライラします。無駄なので何も言いませんけど」

「…………… まあいい、場所はどこだ？」

あつちです、と指で示す。

「僕が来た道を逆に向かって、突き当りを曲がれば見えてきますよ」

「そうか、なら道案内をしてもらおう必要はなさそうだ」

グレンが立ち上がる。

「騒ぎは起こさないでくださいね？」

「なるべく穏便に済ませようとは思っているがな。そこらへんは『幻狼』次第だ」

「そうですか」

彼がテーブルに、何枚かの紙幣を置く。昼食代を払うには多すぎる金額だ。

「無駄話に付き合わせた詫びと礼だ。これで好きなものを食べるといい」

「悪いですよ。困ります」

「鬼だからな、人を困らせるのは当たり前だ。だが俺は義理堅い男でもある。受け取っとけよ」

そう言つて長刀を腰に差した鬼は、僕の教えた方向へ歩き始めた。

しばらく見送って、姿が見えなくなると僕もゆっくりと立ち上がる。

「帰るか」

鬼の男に教えた適当な方向ではなく、反対の方向へと歩きだす。走りはしない、けれど少し足早に。

昼飯を食べ損ねたな、と思いながら。

僕は、ロアさんのいる「ウーズ」へと向かった。

おわらないで

「ごちそうさまザマス」

「美味しかったわ」

「たまに食べたくなるのよねえ」

昼も過ぎた斜陽の午後。

「ウゝズ」で談笑をしていた主婦たちが椅子から腰を上げたことに気付く。

抱えていたトレイをテーブルに置き、レジへと向かう。

支払われた硬貨を受け取り、細かくなつた小銭を差し出す。

「あ、ありがとうございます。またのお越しを、お待ちしております」  
少し詰まってしまった。

うまく笑えていなかったようにも思う。

「ウゝズ」の仕事は少しずつ覚えて来たけれど、未だに笑顔を浮かべられない自分に嫌気が差す。

以前より客足が離れていると聞いていたし、その原因が自分だという事も理解している。

客を戻すのに必要なものは評判なのだから、折角来ていたお客にはできるだけいい気分で帰ってもらいたかった。

不安になりながら主婦の様子を伺う。

彼女らは辺りを見回すと、口元に手を寄せながら話しかけて来た。

「ね、ロアさんと店長さんってどういう関係なの？」

「……………？ 私は、アルバイトで雇ってもらっています」  
なるべく慎重に答えるが、主婦たちは首を振る。

「違うのよねー」

「それは見たらわかるザマスワ」

「あの……………？」

何を答えればいいのか困っていると、女性たちから驚くべき言葉が飛び出て来た。

「恋人とかじゃないの？」

「噂になってるわよねー」

信じられない話だった。

しかも噂になっていろいろらしい。

「最初ビツクリしたものだ。あの大人しい店長さんが、急に美人な店員さん雇うんだからー！」

「そういうのに興味なさそうだったもんね」

「絶対何かあると思ったザマス」

「レイシアちゃんも焦ってたわよ」

「意外よね、THE・草食系っていうか、壁を作るタイプだと思ってたのに」

「でも旦那とは仲いいわよ」

「従魔士さんたちとも仲いいザマスわね」

「交友関係は広いのよね」

「ノストに来るまでは旅してたっていうし、意外にミステリアスなところもあるわよね」

「二」で、どうなの」

詰め寄る主婦たち。

怒涛の会話になんとか返す。

「恋人じゃ、ないです」

はつきりと、否定する。

命を拾われて、仕事を貰って、住む場所さえも借りている。

恩を返すと言って、それ以上のものを受け取っている。

そんな彼に、魔族と付き合っているなんて誤解を広めるわけにはいかない。これ以上、迷惑を掛けたくない。

「えー、本当?」

「みんな最初はそういうのよ」

「いえ、本当に……………」

「あたしも旦那がね」

「あの」

「アラヤダ、それなら家もさ」

「あ」



「ザマスアアアアアア!!」

どうやって誤解を解くか困っていると、紫髪の女性が声を上げる。

「あっ!! そろそろ特売の時間が始まるザンス!!」

「あの、そういう関係じゃ……………」

「急がねば、これにて失礼」

「また来るわね」

あっという間に走り去っていく主婦達。

静まり返る店内。

呆然と立ち尽くす。

言いたいことだけ言われて帰られてしまった。

静かになった店内で、食器を片付ける。

「……………恋人か」

彼女たちの言葉を繰り返す。

「ウゝズ」で働く自分と店長、街の人間にはそう見えているのだろうか。

見えて、しまいのだろうか。

「なら」

言葉が漏れる。

なら彼は、ウイルと名乗った青年は知っているはずだ。

自分と違い街の人間と関りがある彼ならば、自分たちがどう思われているかも理解している筈だ。

なら彼は、自分たちの関係をどう思っ

「馬鹿な」

胸を手で押さえ、何か溢れそうになるのを抑え込む。

それは、思いがりだ。

彼が「良い人」なのはわかっている。

自分のような訳ありの魔族を拾い、何も聞かずにリスクを承知で店に雇い続けている。

金も居場所もない魔族を「ウゝズ」に住ませ、好きに使っていい

と部屋まで与えている。

優しいのだ。

きつと、彼は誰にでも優しい。

だから思いあがるな。

これ以上を考えるな。

自分は十分に恵まれているのだから。

「あ……………」

夕暮れ時の風に乗って、彼の足音と匂いがした。

どこか温かい、落ち着いた温かい匂い。

だが、少し急いでいるのだろうか、彼の足音は少し早かった。

「すみません、店を任せっきりにしちやいました」

「……………」  
「問題ない、なんとかなった」

彼が店を見渡して、客がいないことを確認する。

「どうかしたのか?」

「……………」  
「いえ、今日は疲れたので店を閉めようかなと」

「そうか、なら休んでいてくれ。片付けは私がしよう」

「CLOSED」と書かれた看板を出す。

店前に掛けようと外に向かおうとして、店長に止められる。

「店の点検もしたいんで、僕がやりますよ。ロアさんは休んでいてく

ださい」

「本当に、大丈夫か?」

「ええ、手早く終わらせるつもりですから」

「なら頼む」

店内の奥に引っ込もうとして、「あつ、そういえば」と呼び止められる。

「ロアさんって、傭兵だったんですよね?」

「ああ、そうだ」

「じゃあ旅行に行きたいので、案内役をしてもらえませんか?」

「それは構わないが、何時だ?」

「うーん、明日から? とか」

「……………」  
「それは急だな」

準備の良い彼らしくない言葉だった。

「そこは申し訳ないんですけど。給料とは別でガイド代は払います」

「そんな思い付きみたいで、大丈夫なのか？」

「基本思い付きでしか行動しないですよ、僕」

「そうなのか？」

「そうなんですよ」

どこかとぼける様な言動、相変わらずの無表情。

初めて出会った時のように、彼の真意は読み取れなさそうだった。

「わかった」

「いいんですか？」

意外そうな声。

返答に期待していなかった様子だが、自分が断る理由は特にない。

「ああ、だが観光には詳しくない。楽しむための旅行なら私は連れていけない方がよい」

「そこはまあ、頑張りましょう」

「…………… 善処する」

じゃあそんな感じで、と言って店長が店の奥に消える。

待っている間に湯を沸かす。

簡単に用意できる茶請けを用意して、茶瓶の中にある茶葉を入れかえる。

店で働いて覚えた業務の一つだ。

戦いしか知らなかったけれど、このくらいは出来るようになった。

疲れていると言っていた。

せめて一息、彼には休んでほしかった。

彼に。

ウイルに。

「…………… ウイル」

言葉の響きを噛み締める。

そういえば、自分は彼のことを何も知らない。

知っていることと言えば、「ウゝズ」の店長であることくらいだ。そ

ういえば旅をしていたと聞いた。レイシアという誰かとも知り合いのようだ。

湯が沸く音がして、我に返る。

茶瓶に湯を注ぐ。

また、聞いてみよう。

旅行に行くのなら、旅の途中で話を聞く時間はあるだろう。

心の中で祈る。

ずっと続けとは願わない。

ただ、もう少しだけ。

この夢のような、穏やかな時間が続きますようにと、願った。

けれど

ガラんと、扉が開く鈴の音が響く。

夕暮れの光が、扉から差し込む。

影が落ちる。

闇を切り取ったような暗い、昏い人影。

その影法師は大きな刀を携えていて、二本の角が生えていて

「見つけたぜ」

「なににより、焼け付くような戦場と、懐かしい流血の匂いがした。」



昏い

「見つけたぜ」

朱い夕陽を背に、黒い鬼が嗤う。  
人を食ったような、心底おかしそうな凄惨な笑み。

他の感情は一切存在しない、ただ探し続けていたものを見つけた歓喜の感情を男は発露していた。

「よう、『幻狼』。元氣そうで何よりだ」

ロアが僅かに思考、口を開く。

「……………『赤色鬼』か」

「へえ、俺を覚えてたのか？」

「何度か、出会っただろう。それに、厄介な魔族だと有名だ」

「嬉しいねえ」

なら、とグレンが続ける。

「俺が、お前に会いに来た理由はわかるかい？」

鬼の纏う空気が変わる。

喜悦の中に、ヒリつくような殺意が入り混じっていく。

僅かに前傾させた姿勢から長刀の鯉口を切り、硬い金属の軋る音が響く。

それ以上の言葉はない。

闘争を生業とする魔族が向かい合い、武器に手を掛けるという意味は何よりも解りやすい。

「…………… 正気か？ 街中だぞ」

「確かに街中だ、平和な上に、人も大勢いる。ぶち壊すなら、それはそれで愉快だろうぜ」

「貴様」

スツとロアが目を細める。

持っていた茶瓶をテーブルに降ろし、相手との距離を測るように足の配置を入れかえた。

肩幅程度に足の間隔を開け、半歩下がる。

彼女は武器を持っていない、身構える様子はない、逃げる素振りもなく、彼女は静かに鬼人と対峙した。

戦意を滲ませる魔族の前に、無防備とすら思える立ち姿。

だが、焦りを微塵も感じない落ち着き払った態度から、これが『幻狼』の構えなのだと認識する。

もともと武器を必要としない戦闘スタイル技術なのか、そもそも本気を出すまでもないと思われるのか。

どちらにせよ。

「ハハッ、いいねえ！」

『幻狼』の反応は、鬼を期待させるには十分だった。

噛いながらグレンが長刀の柄を握る。

呼応するようにロアが一步を踏み出す。

両者から殺気が放たれ、ゆらりと空気が歪む。

双方ともに生粋の戦闘種。

人ならざる異形の獣。

殺意と暴力で構成される異端の怪物。

交差し、激突し、魔族としての性質を存分に発揮しようとした瞬間

「あ？」

何かが飛来する。

反射的にグレンが即座に抜刀、そして切断。

瞬間、斬られたモノが突如発火する。

斬り裂かれたナニカは、火を纏いながらベシヤリと湿った音を立てて床に落ちた。

グレンが眉をひそめる。

発火ではなく、水を斬ったかのような物体の手応えに首を傾げる。

いまだ燃えているモノをまじまじと見つめ、そしてぽつりと呟く。

「……………スライム？」

弱い魔獣、というか歩く食べ物。

場にそぐわない魔獣の乱入に首を傾げる。

スライムが飛来した方向を見ると、死んだ目の青年が小さなスライムを大量に入れたバケツを抱えて立っていた。

「どうやらスライムを投げたらしい人間の顔を見て思い出す。

「その不景気な顔、さっきの小僧じゃねーか」

「店長……………」

「ウゝズ」の店主は、少し面倒くさそうな表情で口を開いた。

「店内での荒事はやめてください」

\*\*\*

僕は増やしたスライムを、いたるところにばら撒いている。

というわけで、「ウゝズ」にも当然いる。

従魔士の特権として視覚や聴覚などの「感覚共有」が出来るので、それを利用してスライムを監視カメラ代わりに用いているわけだ。

いつもは悪ガキに回収されては玩具にされている小型スライム達なのだが、今回ばかりは真面目に役に立った。

ロアさんと因縁のありそうな人間が現れたので、旅行という名のトンズラをしようと荷造りをしていたのだが、スライムの視界にグレンが見えたので慌てて出て来たわけである。

とはいえ、一触即発な雰囲気魔族同士の間割って入るという選択肢はない。

性能<sup>スペック</sup>だけを見ても、人の形をした魔獣とまで呼ばれる彼らである。貧弱な人間代表の僕が下手に割り込んでも、無駄に死傷者を増やすだけだ。当然、被害者は僕である。

しかし上手い方法も思いつかなかったので、店裏で養殖していたスライムをバケツに詰め込み、投げ込んだわけである。

スライムなので攻撃力はないに等しいのだが、まあ気を引ければい



いかという発想。あとスライム投げてキレられても流石に殺されはしないだろうか、かなり現実を舐めた考えのもと実行した。

正直後悔している。

商品のスライムホールが真つ二つにされた上に、おそらく魔法で燃やされた。

刃物持った相手にスライム投げるとか馬鹿じゃねえのか。

だが実際、わりと気が削がれたらしい。

燃えるスライムを踏み消しながら、グレンが肩をすくめて長刀を鞘に納める。

「よう、ウィル アーネスト。さつき振りだな」

「さつき振りですね、グレンさん。ところで、どうしてここにいるんですか？」

グレンがおかしそうに笑う。

先ほどもまでの荒々しい雰囲気は嘘のようだった。

「いやな、愚劣で吐き気を催すクズな情緒の安定しない変人に道を尋ねたんだがな。どうやら嘘を教えられたみたいだから、もう一回道を聞こうと匂いを追いかけて来たんだよ」

「それは災難でしたね」

しらを切る僕に「それでもない」と返ってくる。

「お陰で本命に出会えたんだからな。感謝だつてしてるぜ。舌を抜くのは勘弁してやるよ」

「極東ジョークですか？ あんまり笑えませんかよ、それ」

「そうだよなあ、だいたい皆、言葉にならねえ悲鳴を上げるんだわ  
不味い、超逃げてえ。」

こんな冗談であつて欲しい会話は初めてだ。

が、それはそれとして聞かねばならないことがある。

「店内で暴れないでくださいよ。人探しが目的だったのでは？」

「ただ魔族流の挨拶をしただけさ。人探しも嘘は言っていない。だが、目的を達成したら次のステップしてもんがあるだろう？」

「…………… 次のステップ、とは？」

「人殺し」

あまりにもあつさりど、彼は目的を告げた。  
人殺し。

人を殺すこと。

他者の生命を絶つこと。

あまりにもシンプルな単語。<sup>ワード</sup>

けれど、それ故に間違った解釈のしようがない言葉に閉口する。

「しっかしお前、まさかスライムの従魔士とはね。魔力量が少ないわけだ。弱いと苦労するだろう?」

「まあ、なかなか強くはなれませんが、スライムが儲かっているので楽はしますよ」

「ん? …… あー、スライムホールか! く

く、あんなもん思いつくとか、なかなかイカれてるな、お前!」

爆笑された。

めっちゃ笑うじゃん。

だが機嫌が良さそうなのは好都合だ。

「あー、そのー、いったん帰って欲しいんですけど。そう、閉店時間なので」

相手は出会った瞬間暴れだそうとする輩だ。

刺激しないように低い姿勢からちよつとお願いするみたいに話を切り出す。

「んー、俺的には『幻狼』にまだ用事があるんだがなあ」

だが、やはりというか、あつさりとは帰ってくれなさそうだった。

そもそも人殺しに来たという尋常ならざる手合い。何かきつかけさえあれば、すぐにでも戦闘が始まりそうだ。

街中で揉め事を起こされると、近所付き合的に困る。

どうにか上手く言いくるめる方法を考えながら、僕を庇うように前に立っているロアさんを見る。

彼女はチラリと僕を見ると、目を伏せて「すまない」と短く呟いた。

『赤色鬼』、この場でお前と話すことはない。争うつもりもない。一度帰ってくれ」

「オイオイオイオイ、そりゃあ都合が良すぎるつてもんだらうがよ」

グレンが呆れたような表情を浮かべる。

「お前が組織から黙って抜けた、怒った組織が「魔族」に搜索を依頼して、請け負った奴がお前を見つけた。そうなたちまったらケリを付けるしかないだろ」

「ああ」

「逃げ隠れる時間は終わっただろうが」

「わかっている」

『赤色鬼』が「この俺が、場所を選ぶような奴じゃないこと  
もか？」

かちやりと鬼が長刀を抜き放ち、ロアさんに向かって突きつける。  
だが彼女は動かない。

切っ先は彼女の喉元へ。

皮膚に刃が食い込み、プツリと小さな血の球が浮かぶ。  
グレンが刃を押し込めば致命傷になる状況。

「すべて理解している。その上で頼む」

交渉ではない。

ロアさんのそれはもはや懇願に近いものだった。

もはや相手に状況を左右する主導権を委ねている状態。動かない鬼の剣士を見ながら、いざとなれば巨大スライムを召喚できるように構えておく。2人の間に割り込むように召喚すれば、多少の時間稼ぎくらいはできるはずだ。

嫌な沈黙を見守る。

「……………ふーん」

意外にも、何かを察したのかグレンが剣を納める。  
ガリガリと頭を掻きながら、つまらなそうな表情を浮かべる。

「ま、いいぜ。出直してやる」

「……………感謝する」

ひとまず場が収まったことを察する。

「だが、そう長くは待てないぜ」

「時間を掛けるつもりはない」

「こんな場所がそんなに大事かね」

「この店には、拾われた恩があるというだけだ」

へえ、と興味なさそうに頷くと、グレンがこちらを見る。

「そういうわけだから今日は失礼するわ。」

「……………意外にあっさり引いてくれるんですね」

「ん、なんだ。暴れていいのか？」

「それは困るんでやめてください…………… 純粹に気になるだけですよ」

だから刀に手を掛けるのを止める。止めて下さい。

「簡単な話さ。俺は鼻が利く。一度見つけた以上、逃げてても匂いを辿れば追いかけられる。なら、急いで仕掛ける必要も特にない。待つてくれと言われたなら多少は融通してやるさ」

「匂い、ですか。アレ、何かの例えじゃなかったんですね」

「嗅覚は別に狼や犬だけの特権じゃないってことだ。俺の場合は調子が良けりや嘘ついてるかどうかともわかるな」

嘘を看破するほどの異端の嗅覚。

一度捕捉すれば逃がさないという、追う側としての圧倒的な優位性。

そりゃあ余裕を保てるわけだ。

いくら逃げようと、際限なく追いかけられる。

「鬼ごっこに終わりが無いのなら、勝つのは当然鬼側だ。逃げ手に戻ってしまったプレイヤーはその運命を受け入れるしかない。」

なら、グレンと出会った時点で、ロアさんとの関係を誤魔化すのも無理だったわけだ。

「僕に話しかけたのも、貴方の嗅覚に引っかかったからってことですか」

グレンが首を傾げ、思い出したように声を上げる。

「お前からするロアの匂いは薄い。声をかけた時には、正直わからなかったな。しばらく会話と反応を見てようやく気付けたくらいだ」

「じゃあ、運が悪かったってことですか。ツイてないですね、僕」  
「まあ魔族に出会ったつてのには同情するがな。だが、声を掛けられたのはお前が悪いぜ、ウィル アーネスト」

口元を吊り上げ、皮肉気に鬼は続ける。

「あの時、出会ったお前は———— 本当に酷い表情かおをしていたよ」

「思わず声を掛けちゃうくらいには、な」と言うと、グレンは「ウゝズ」を後にした。

鬼の指摘に僕は何も言わなかった。  
何も、言えることはなかった。

\*\*\*

静寂が戻る。

グレンが姿を消してからしばらくして、大きく息を吐く。  
どうやら、自分が思っている以上に緊張していたらしい。

警戒を解いたのかロアさんが駆け寄ってくる。

「店長、大丈夫か？ 怪我はなかったか？」

「まあ、なんともありませんよ」

僕がしたのはスライムを投げつけるという愚行だけだ。

結局、何も起こることはなかったのだから、怪我をしたわけでもない。  
いい。

それよりも気にするべきは彼女の方だろう。

「ロアさんこそ大丈夫ですか？ なかなか厄介な雰囲気知り合いでしたけど」

鬼の魔族

グレンを思い出す。

何時から追われているのか知らないが、あんなのに追い回されていれば心労も凄いことになっていそうだ。

ロアさんが「問題ない」と答え、そして目を伏せる。

「……………すまない。危険な目に遭わせてしまった」

「謝らないでください。運が悪かっただけですよ、こんなの」  
運が、悪かった。

というか、相手が悪かった。

声を掛けられた僕の不手際も原因だろうか。

あの鬼の魔族を前に、そう長くはロアさんの存在を隠すことはできなかつただろう。

そう伝えるが、彼女は首を横に振る。

「いや、これは私の責任だ。」

——私がいたから、奴をこ

こに呼び寄せてしまった」

「……………それは」

「私は逃げていたんだ。殺すのも、殺されるのも嫌になった。敵意を向けられるのに疲れて、戦うのを辞めて何もかもから逃げた」

苦しそうに話す彼女を見て、ようやく理解する。

魔族は呪われていて、災いを呼ぶ。

それは彼らが争いを生業としているから。

闘争は暴力と流血によって成立し、憎悪と報復を生み出し、その魔族を中心にさらなる戦場が展開される。

単純であるが故に完成された負のスパイラル。

戦うほどに抜けられなくなる、徹底された泥沼の世界。  
延々と続く闘争の連鎖。

だから、『幻狼』は逃げたのだ。

争いの少ない辺境へと身を隠し、戦いとは縁のない仕事に就いた。

そうやって魔族の持つ災いから、自身が積み上げた呪いから、戦うという選択肢から逃れようとした。

「ウーズ」で働いて、争い以外の時間を過ごして、私でも戦う以外の

ことができるのだと勘違いをしていた。こうなることを解っていた筈なのに、それをずっと見ないようにはしていた」

彼女がいつから、どのような過程を経たのかは知る由もないけれど、その目論見は成功していたのだろう。少なくとも、最初のうちは。だが、追い付かれてしまった。

逃げることを止めてノストに留まったから。

ロアという魔族の過去が、追いついてしまった。

呪いのような禍根が、災厄が如き闘争が、もはや無視できないほどに、彼女の下に辿り着いてしまった。

「すまない。もう、ここでは働けない。恩も、返せそうにない」

そう言つて、ロアさんは弱々しく微笑んだ。

何かに疲れ切つたような、諦観に満ちた表情の彼女を見て、言葉に詰まる。

「私は、『赤色鬼』に会いに行く」

「何を、するつもりですか」

「……………」

ロアさんは答えない。

だが、答えは解りきっていた。

あのグレンという名の魔族は、『幻狼』を探していた。

組織に雇われたという話はきっかけに過ぎず、彼にとつては命こそが目的だった。

彼女はもう逃げられない。

逃げれば『ウゝズ』に怒りの矛先が向くかもしれないから。

少なくとも、周囲に被害が出ることを嫌う程度には彼女は義理堅かった。

「……………」 逃げてください」

絞り出した選択肢。

これしかない。

「逃げる？ 私が逃げれば『ウゝズ』が報復されるぞ」

「なら僕も逃げます……………」 旅行ですよ、僕が言っていたでしょう」

「アレは、私を『赤色鬼』と会わせない方便だろう」

「それなりの目的あつての旅行なので」

ノスト周辺のスライムは大体調べ終えたのだ。

そろそろ他の環境に分布するスライムを探したい、まだスライムの適応能力も試していないし、素材を食べさせて変種スライムも育ててみたい、スライムホールの販路も広げる狙いもある。

なににせよ、そのうちノストの街から活動拠点を移す予定だった。それが少しばかり早まっただけの話だ。

「逃げ続けるのは苦しいぞ。君が、生活を捨てるほどの価値が、私には無い」

「僕はそう思いませんが。案外楽しいかもしれませんよ」

『ウーズ』はどうする」

「まあ、壊されるかもしれませんが、最悪建て直せば大丈夫ですよ」

嗚呼。

我ながら、下手な説得だ。

言い訳がましい言葉の羅列で、問題を先送りにするだけの思い付きに、彼女を無理やり付き合わせようとしている。

けれど、ここで彼女を引き止めなければ、何かが致命的に終わってしまう予感があつた。

それだけは許せなかつた。

それだけは嫌だつた。

幸い、金には余裕がある。

観光できそうな安全圏を適当にぶらぶらしながら逃げれば、ほとんどほりが冷めるかもしれない。

状況が落ち着けば、ノストに戻ることも出来るだろう。

そんな風に考えていると、ロアさんが静かに笑う。

「まるで、子供だな」

「え？」

思わずロアさんの顔を見る。



彼女は初めて見る、冷たい表情をしていた。

「いままで苦勞もしたことの無い人間の発想だ。そんなに、平和ボケした甘い妄想は楽しいか？」

「ロアキ」

「ッ!?!」

「馴れ馴れしく、名を呼ぶな。気色悪い」

気が付けば、喉を掴まれていた。

片腕で僕の首を握り、無造作に締め上げる。

呼吸ができない。

暴れても振りほどけない。

片腕だというのに、恐ろしいほどの力。

「私を雇って、上に立ったつもりだったか？ 憐れな魔族を雇って

やって、気分はよかったか？」

「……………ッ」

『赤色鬼』から守ったのも、金づるがなくなると困るというだけの話だ。それを何を勘違いしたか、一緒に逃げるだど？」

底冷えするような視線で射抜かれる。

擦れそうになる意識の中で捉える、いつもの彼女らしからぬ荒々し

い振る舞いに思わず言葉を失う。

「弱者如きが、私にすり寄るな！ 不愉快だ、本当にイライラする！

お前も、この街の人間も、『赤色鬼』も、弱いくせに畏れを知らない態

度が心底勤に触る！」

「……………」

「だから——私にはもう関わるな」

ああ、なるほど。

今までの彼女が嘘だったわけではないのだろう。

恩を返そうとしたのは本場で、要領よく働けないことに悩んでいたのも本心で、「ウゝズ」で穏やかに過ごしていた彼女は本物だった。けれどこれは彼女の叫びだ。

魔族として、強さを信じ、鬪争に生きた『幻狼』としての、紛れも

ない本音だ。

魔族の苦しみを知らない人間が、ロアの身を案じるという意味。

弱者が彼女と馴れ合うという意味。

彼女に施すという意味。

それは、彼女自身の存在と存在の否定に他ならない。

事の正否は需要ではない。ただ強さだけを信じ、苛烈な闘争の中で、いままで一人で必死に生きた『幻狼』にとって、それはプライドを踏みにじられるという行為だったただけだ。

これは、僕が悪い。

完全に失言だ。

けれど

「っ！ 何をしている!?!」

自分の喉を掻きむしる。

爪を、指を肉に食い込ませ、血が出るほどに掻きむしる。

そうして僕の首を握る彼女の手に指を潜り込ませ、力づくで広げる。

力の差は歴然。

けれど突飛な行動が功を奏したのか、少しだけ気道を確保できた。

「れ——でも」

『幻狼』は自身の怒りを叫んだ。

けれど彼女は戦いに疲れたのだとも言っていた。

『幻狼』ではなく、殺すのも殺されるのも嫌になったのだといった彼女もまた、自身の本音を語っていたはずだ。

なら、僕は言わねばならない。

強さや弱さは関係なく、同じ人間として彼女に伝えなければならぬ。い。

薄れきった意識の中、残った肺の空気を絞り出して言葉を吐き出す。

「それでも貴方は、もう誰も殺さなくていいんです」

「お前は、何を」

それ以上は喋れない。

暗い視界。

戸惑いの声を聴きながら、僕の意識は闇に落ちた。

## 終われ

気を失った青年の身体を抱えて『ウゝズ』の奥に設けられた小部屋に横たえる。

脈と呼吸を確認する。

規則正しい脈拍、穏やかに繰り返す呼吸。

元より締めていた呼吸は二次、堰き止めていたのは首に走る動脈の流れ。

脳に血が行かなければ、すぐに意識は落ちる。気絶した後に絞束を継続しなければ命にも別状はない。

だから、気にするべきは彼自身がつくった傷だ。

彼が自身の喉を掻きむしった傷を診る。

加減せずに指を食い込ませたのだろう。血管は傷付いてはいないが、思った以上に深い跡になっていた。血管は傷付いてはいない

血をふき取って、適当な処置を施す。

傷の手当だけは得意だった。

それだけは、戦場で覚えたから。

「……………なぜ、こんなことをした」

彼に向けた呟きが、静寂にとける。

強い言葉で突き放したはずだ。

力任せに掴まれて、命の危険すら感じただろう。

自分を傷つけるのは恐ろしかったはずだ。

だというのに、こんな傷を作ってまで出した言葉は、恨み言でも命乞いでもなかった。

視界が歪む。唇が震え、言葉にならない声が漏れる。

「彼が必死に言葉を紡いだ理由がわからない。口にした言葉の意味もわからない。」

なにより彼を拒絶した自分が、なぜこんなにも苦しいのかが、わからない。

滅茶苦茶な気分だった。

奥底で何かが乱れる感覚、思考が妙にまとまらない。

「私には、わからない」

嗚呼。

けれど、わかることもある。

彼との関係はここで終わるのだ。

今を続けられない理由はたくさんあったけれど。最後に終わらせることを決めたのは自分だから。

奥底から湧き上がる何かを、ギュツと手で抑え込むようにして瞼を閉じる。

「…………… 終われ」

もう、余計な混乱は必要ない。

最後のだから、「わからない」は必要ない。

「終われ」

言葉を重ねる。

混乱するナニかを忘れるために、自分に言い聞かせる。

「終われ」

自分の過去を思い起こす。

強く在ることだけが生きるための真実。

それ以外の要素は不要、無意味な上に、事実を濁す不純物に過ぎなかった闘争の世界。

何もかもを殺し続けた冷徹な自分を思い出す。

「終われ」

また、一人に戻るだけだ。

戦うことが当たり前前の、あの頃の強い自分に戻るだけ。

だから、何も変わらない。

あの頃の自分には、どんな言葉も届かない。

『幻狼』はなにも揺らがない。

目をゆつくりと開く。

胸中をかき乱していたナニカは、もう治まっているようだった。かつての自分ほどではないけれど、冷たい思考が戻ってきたのだと思えた。

少なくとも、やるべき事だけはハッキリと解る。

足早に小部屋の出口に向かう。

もうこの店に用はない。街に留まる理由も残っていない。

けれど、ドアを開けて出ていこうとする時に、一度だけ後ろを振り返る。

青年を見る。

「……………」

他人に食い物にされるタイプの人間だ。戦いにならないほど弱い上に、誰かを踏みにじるほどの強かさもない。

『幻狼』として評価できる点は一切ない男。

けれど魔族を拾った奇特な人間に思うことはいくつかあった。

気を失っているから聞こえることはない。

単なる自己満足で、伝える意味もない。

だから短く、二言で済ませることにした。

「ありがとう、さようなら」

返事を待たずに扉を閉める。

ガチャリと、無機質な音だけが返って来た。

## 『炎血』

巨大な月が、空に輝いている。

薄明かりを浴びながら、人気のない道を歩いている。

道路の上を覆うように生える木々。

もう舗装してから何年も手入れをしていないのだろう。かつては綺麗だったはずのアスファルトは、ひび割れて見る影もない。

安全圏と言っても、その領域全てに人がいるわけではない。

都市クラスの安全圏であれば話が変わるが、辺境の安全圏では人が立ち入らない場所も多い。

なるべく魔獣からの被害を抑えるために、住環境は中心部にかたよっているし、農地や店舗、従魔士ギルドにライフラインを維持するための施設も同様だ。

安全圏の面積に対して、住むだけの人間が足りていない。

自然と人が離れ、誰も訪れなくなった「捨てられた場所」があるのだ。

ロアが向かっている場所も、そういう所だ。

「……………」

木々をかき分けて辿り着いたのは、古びた廃工場だった。

安全圏の外縁部に属する場所。

風雨にさらされ、赤錆を浮かせたその施設は、無価値となった物だけが持つえもいえない寂寥感があった。

廃工場の中に入ってしばらく進む。

匂いがする。

懐かしさすら覚えるよく知る匂い。

闘争に生きる魔族がよく纏う、戦火を広げ、暴力と殺意に塗れた者特有のソレ。

—— 焼けつくような血の匂いだ。

廃工場にいることは解っていた。  
匂いを辿って来たのだ。

強くなる災厄の香りが、この場所にいることを明確に知らせていた。

だが、存在に気付いたのは相手も同じだったようだ。

「思ったより、早かったな」

視線の先には鬼がいた。

異形の双角、夜闇にとけるような黒装束。

煌々と赤眼を輝かせ、愉快そうに嗤う悪鬼が建造群の中心に立っていた。

「ただの雇用関係だ。そう時間は必要ない」

「そうかいそうかい。なら、これで心置きなく戦えるってわけだ」

グレンが鷹揚な態度で、腰に下げた長刀に手を掛ける。

応じるように、ロアが拳を構える。

視線を交えたのは一瞬だ。

「クハッ！」

敵意が爆発する、

地を踏み砕く音、抜刀の擦過音。

眼前の相手を打ち斃さんとする激突と衝撃をもって、二匹の怪物の戦闘は幕を開ける。

互いに動き出したのは同時。

だが、間合いを詰める速さは『幻狼』が上回っていた。

「あ？」

神速



そう表現するしかない速度で彼我の距離を瞬時に詰めきり、ロアが拳打を撃ち放っている。

初動から攻撃までに一呼吸で至る動作。

呼吸を用いた脱力、重心の移動、肉体の操作をもって、相手の意識の間隙を突く。純粋な技術のみで成立する加速にグレンが目を見開く。

対応は間に合わない。

グレンの抜刀を置き去りにして、ロアの拳が身体を撃ち抜く。

轟音

鈍い衝撃が大気を震わせる。

内臓が弾け、骨を砕き潰す鈍い感触。

備わる人外の筋力に加え、身体活性による自己強化で引きあがった一撃は、攻城兵器にすら匹敵する威力と化す。魔族であろうと看過できるダメージではない。

それはグレンも例外ではなく、異物まじりの血を吐き出す。赤が地面を濡らす。

だが

「…………… 初見殺しの歩法わぎってやつか。予想以上に速い」

「っ!？」

「けどまあ、一回見れば十分だ。次は対応できるな」

ロアが規格外の速度なら、—— グレンには規格外の耐久があった。

ギシリ、と身体を軋ませながら、グレンが凄惨な笑みを浮かべる。撃ち込んだ姿勢のまま、ロアが気付く。

姿勢が崩れていない。

腰を深く落とし、未だ鞘に納めた長刀に手を掛けている。

「染めろ『炎血』」

魔力の蠢き。

グレンの剣がブレるように抜刀される。

咄嗟に頭を下げて回避する。

瞬間、焼けつくような熱がロアを通り過ぎていく。刀の間合いの遙

か先、彼女の背後の壁に焰の線が刻み込まれる。

赤熱する斬痕が、一瞬輝いたかと思うと、熱と衝撃の破壊を撒き散らす。

がらがらと建造物が燃え上がりながら倒壊する。

射程距離のある斬撃。それも凄まじい威力。

「足元注意だ」

「ツチー」

背後に意識を割いた瞬間を畳みかけるように、予兆なく足元の地面が爆炎を噴き上げる。

呑み込まれる寸前で、ロアは後ろに飛びのく。

だがグレンは、動くことすらなく焰に取り込まれた。

自滅

そんな言葉が頭を過ぎるが、ロアの直感はまだ警鐘を鳴らし続けている。

「おし、もう痛くねえ。治りが速いのは魔族の良いところだな」

離れてなお肌を焼く焰の柱。その中から、グレンが涼しい顔で現れる。

「出し惜しみは無し、だ。技術云々を抜いても、どうやら身体スペックの性能は負けてるみたいだしな」

「……………炎が、お前の魔法か」

魔法。

魔獣と魔族の持つ、人を優越する特権技能。

能力差こそ存在するが、世界の理に縛られぬ異形の法。

目の前の鬼は、炎を操る魔法を有している。

「いいや違うね、燃える血液が俺の魔法だ」

「……………」

「隠すほどでもねえ。魔法つてのは、そいつ自身の在り方だからな」  
グレンが長刀の刃を握り、横に引く。

掌の肉が斬り裂かれ、溢れた血液が付着し、発火する。

そうして、燃える長刀が完成する。

「闘争こそが魔族の存在理由。戦火と流血の地獄が俺達の住処。」

故に『炎血』<sup>えんけつ</sup>。燃えあがる血飛沫こそが、俺の魔法の在り方として相応しかろうぜ」

グレンが血が流れる手を振る。

血液が辺りに飛び散り、発火して燃えあがる。

燃烧し、延焼し、燃え広がっていく。

「だから『幻狼』、俺はお前の魔法に興味がある。あの十年前の惨劇、魔王戦争を生き抜いた怪物はどんな魔法<sup>在り方</sup>なんだ？」

長刀を肩に担ぎ、悠然と接近してくる。

厄介な相手だ。

相手だけを傷つける強力な炎の爆撃。

射程距離のある炎の斬撃によって間合いの有利を取られている。

潜り抜けた先には魔族特有のタフネス、流血するほどに被害を拡大させる『炎血』。

そして被害を気にしない精神性。

「お前——最悪だな」

「そりやお互い様だろ。魔族だからな」

鬼が嗤い。

狼は笑わない。

燃え盛る領域で、二匹の魔族は再度衝突した。

\*\*\*\*\*

「『炎血・刻飛』<sup>こくひ</sup>」

グレンがロアに狙いを定め、炎刀を数度振り抜く。

駆け抜ける熱の斬撃。

射程を無視した遠距離斬撃。

炎線が幾重にも走り、それをロアが疾走して回避する。

赤い斬撃が周囲に刻み込まれ、膨大な熱量を持って建造物を倒壊させていく。

それら一切に目もくれずロアは駆ける。

前後左右の切り返し、加減速を繰り返し、複雑な軌道を描きながらグレンに接近する。

「速すぎだなア！」

「黙れ」

顎、胸部、腹部に拳を三発。

凄まじい衝撃が身体を撃ち抜き、鬼の体軀を吹き飛ばす。

ぐらりと傾いたグレンに更なる追撃を加えようとして

気が付く。

いつの間にか、長刀が鞘内に収まっている。

鬼が嗤う。

『『炎血・閃撃』』

鞘に仕込んだ血液が、発火する。

『『赤色鬼』の奥義が一つ。』

鞘を射出機構カタバルトとして扱い、爆炎で剣速を上げるというだけの技。

だが、異形の血液を用いて完成する理外の抜刀術は、炎血の加速によつて反応不可の神速へと至

「黙れと、言っている」

「あ？」

刀の柄を、蹴り込まれた。

刃を鞘に押し戻され、抜刀を封じられる。

いかなる神速の斬撃も、始動を潰されれば無為と化す。

そして、それはあまりに大きな隙だ。

「グエッ」

呆然とするグレンの顔面に回し蹴りがヒットする。

凄まじい勢いで鬼が吹き飛び、轟音を立てながら崩れた瓦礫の山に叩き込まれる。

燃え盛る廢域に、しばらくの静寂が戻る。

「…………… あー、今のは効いたぜ」

ガラガラと瓦礫を押しつけグレンが立ち上がる。

度重なるロアの打撃の影響で、姿こそボロボロだが傷自体は回復している。ダメージはあるだろうが、依然として鬼は健在のままだ。

「強いねえ。まさか無手の相手にここまでやられると思わなかった」

「……………」

「けどまあ、そつちも無傷じゃねえよな」

グレンがロアを見る。

焼け付くような、あるいは焦げ臭い匂い。

火傷だ。

ロアの服は焼け焦げ、全身の至る所に火傷が見えた。

特に攻撃に多用した四肢は、動きに支障をきたしかねないレベルで負傷している。魔法としての性質か、魔族の回復力を持ってしても傷の治りが遅い。

もはや最初程の速度を、ロアは維持できていなかった。

ロアがグレンを攻撃するという事。

それは反撃として「返り血」として、爆発や高温の炎を受けるリスクを背負うという事に他ならない。

『炎血』の性質による自動反撃。オートカウンター

鬼と戦う者は、誰であろうと無事では済まない。

「まあ、じゃれ合いは終いだ。そろそろ本気だせよ。殺しに來い」

「…………… なの、話だ」

「惚けるなよ、白々しい。殺し合いに魔法を使わねえ魔族がどこにいる」

戦闘における切り札。

魔族としての究極のアドバンテージ。

それをロアは、未だに切っていない。

「平和のぬるま湯に浸り過ぎて、まだ踏ん切りがつかねえか。情けねえ」

「無駄口を」

「あー、止める止める。やる気が無いのは匂いで解る」

呆れた表情でグレンがため息を吐く。

「その甘さが、今回の結果を招いたってわけだ。ウイル アーネストも災難だったな」

「もう、奴は関係ない」

「関係なくはないだろ、恩人相手に冷たい奴だな」

「……………」

これ以上は無駄だと感じたのかロアが口を閉ざす。

「やる気が出ないってんなら仕方がある。一つ、多少いいことを教えてやるよ」

思い出したような気軽さで、グレンが会話を続ける。

「俺の血は、好きなタイミングで発火できる。これが使い勝手がいいもんでな。戦う場所に事前に血を塗りつけておけば、設置罠<sup>トラップ</sup>としても扱えるわけだ」

パチンと指を鳴らす。

飛び散っていた血痕が反応し、弾けるように火花を散らす。

唐突な手の内の開示にロアが困惑するが、グレンは気にした様子もなくつつける。

「でだ、俺は『ウゝズ』でお前を襲撃しようとしたわけだが、何の下準備もしなかったと思うか？」

「っ!？」

「少量だが血液を「ウゝズ」に塗っておいたわけだが――――さ  
て、どうしてやろうか」

身をひるがえして、街のある方向へと走り出す。

『ウゝズ』には、眠っている彼がいる。

「待て待て、逃げるのか?」

グレンの声を無視する。

追う様子を見せないことに違和感、だがロアは速度を緩めない。

グレンを背後に回すことになるが、速力はロアの方が上回る。「飛ぶ斬撃」さえ注意すれば、離脱は難しいことではない。

「……………」 ったく。逃がすわけないだろ」

かちやり、と長刀が持ち上がる音をロアが捉えた。

だが、「飛ぶ斬撃」はすでに何度も見た技。来るとわかっていたれば十分に対応可能だ。

最低限の意識を背後に割きながら、未だ形を保っている廃墟に飛び込む。

障害物で射線を遮るといふ、対遠距離戦での常套手段。

だが

「あ」

焦っていたのだと思う。

かつての自分ではあり得ないほどに、不安と焦燥に胸を掻き乱されていた。

故に、思考がまわらなかつた。

先に廃工場に訪れていた『赤色鬼』には、自身に有利な戦場を作るだけの時間があった事を、完全に失念していた。

「設置罠になるって言ったろ」

壁に、床に、瓦礫に、至る所に仕込まれていた血痕が赤く輝く。

それは戦火と流血の顕現。

地獄の悪鬼に与えられた異形の血液。

まともに食らえば、魔族であろうと無事では済まない。

音。

閃光。

衝撃。

膨大な熱を吐き出しながら、『炎血』はロアを呑み込んだ。





## 『虚狼領域』

狭い空間の中で起動される爆発と焦熱。

噴き上がる極大の火焰から、小さな人影がはじき出される。

ロアだ。

ボロ布のようになりながら、彼女は辛うじて生存していた。

「ぐ、う……………っ！」

落下するように着地。

だが、すぐに膝を突く。

離脱する際に被弾したのか、彼女の左足がぶすぶすと焼け焦げている。一目でわかる酷い火傷、少なくともしばらくはまともに走れない。

「おいおい、なんで生きてるんだ？」

グレンが感嘆の声を上げる。

いままで攻撃に用いていた『炎血』は、ほぼ全てを回避されていた。ダメージを与えていたのは「返り血」くらいのものだ。

だが、回避したという事は、当たれば有効であることの証明でもある。

無数に仕掛けた「血痕」の中に、自ら飛び込んだロアに回避も防御もできるはずがない。間違いなくグレンの炎血は、致死の威力をもつて直撃したはずだ。

だが——何をしたのか、重傷ではあるが、生きている。

「流石は『幻狼』と言いたるところだが——正直がっかりだぜ。発破掛けのための言葉で焦るわ、罠の中に突っ込むわ、見てもらええわ」

「うる、やい……………ッ！」

ロアが立とうとして、再度崩れ落ちる。

左足にうまく力が入らない。感覚は失われ、奇妙な痙攣を繰り返している。

それでも立ち上がり、足を引きずりながら街の方角へ向かおうとする彼女にグレンが言葉を投げかける。

「でもまあ、やめてくれと俺に泣きつかなかったのは賢かったな。頼まれたところでどうしようも無かったしよ」

「…………… どういう、意味だ」

背を向けたまま、ロアが足を止める。

呆れた声色の答えが、すぐに返ってきた。

「戦い始めた時についてに発動しちまったからな。店に住んでるなら、今頃死んでるんじゃないやねえの？」

あつけらかなとした雰囲気グレンは言った。

『ウゝズ』にいなければ、<sup>ウィル</sup>彼は無事だろう。だが、ロアは青年があの店にいることを知っている。

他でもない自分が、ウィルをあの場合に置き去りにしたのだから。グレンの言葉に、ロアが動きを止めて、立ち尽くす。

静かな間があった。

「…………… どうして」

誰に問うでもない、口から零れ落ちた言葉。

何に対しての疑問なのかすら定かではない。だが、『赤色鬼』は嬉々として話し出す。

「どうして？ そりゃ『幻狼』と関わったからに決まってるだろ」

「…………… 殺す必要が、あったのか？」

「魔族との協力者なんて邪魔にしかないからな。やるなら徹底的に、だ」

「あいつは、悪い人間ではなかった」

「あー、確かにいい奴だったな。だがな、この世界じゃいい奴ほど在り方として弱い。そして弱い奴ほどすぐに死ぬ。なら、あいつが死ぬの

は当たり前だろうか？」

個々の善悪など些末なことだ。弱いものから死んでいき、力が無ければ抵抗すらできない。

魔族であれば誰もが知る常識は、魔族でなくとも適用される。弱かった彼は、ウイル アーネストはそのルールに呑まれたのだとグレンは言った。

この世界の命は、とても軽い。

「…………… ああ、そうだったな」

「だろ？ 話がはやくて助かるぜ」

「だから礼に、一つ教えてやる」

燃える世界のなかで、グレンに鋭い殺意が突き刺さる。

いままで向かい合う中で、一度として感じなかった激情が、目の前のロアからは放たれていた。

動じた様子もなく、グレンは歓喜の表情で迎え入れる。

「へえ、何を教えてくれるんだ？」

グレンの愉快そうな問いかけ。

ロアがゆっくりと振り向く。

猛る感情を吐き出す『幻狼』は、紅い眼を輝かせながら静かに言い放った。

「私より弱いお前は、ここで死ぬ」

鬼は嗤った。

「それはどうか、なっ！」

間合いの遙か先にいるロアへ向けて、グレンが剣を振り抜く。

『刻飛』

鞘に仕込んだ「炎血」で刀身を濡らし、抜刀と同時に熱の斬撃として放つ長射程攻撃。

炎熱による威力と攻撃範囲の拡張というシンプルな効果。だが、一

方的な攻撃を可能とするソレは戦場で圧倒的な優位性アドバンテージを約束する。

ロアに防御手段はない。避けるとしても、負傷した足では大きな隙ができる。

駆ける斬撃がロアに直撃する。

瞬間。

どくり、と世界が蠢いた。

ロアの横を、斬撃が通り過ぎる。

当たれば魔族であろうと両断する炎の斬撃は、しかしロアの傍にあつた建造物を斬り裂くにとどまった。

「……………あ？」

相手が動いた様子はない。

なのに、当たるはずの攻撃がなぜ外れる？

グレンの疑問を置き去りに、ロアの魔力が大きく脈打つ。

「果てへと至れ『虚狼領域』ホロウヘイム」

ぐにやりと世界が歪み始める。

錯覚ではない。

周囲の火災による陽炎でもない。

ロアの周囲の風景が、まるで水に溶かした絵具のようにねじ曲がり、胎動し、拡大していく。狂気に取りつかれた画家が描いたような空間へと変貌していく。

その中で『幻狼』だけが、形を残している。

赤い視線が、じつとグレンを視ている。

ぞわり、とグレンの背筋に悪寒が走る。

「シィッ!!」

本能的に再度、飛ぶ斬撃を放つ。

だが、やはりロアの近くで見当違いの場所へとズレる。当たらない。原理不明の奇妙な現象。

明らかに「魔法」に起因するもの。

「ようやく、ソレらしくなってきたか！」

「……………」

「どうした、さっきと始め……………」!?」

目の前に、ロアが立っていた。

一歩も動く様子はなかった。

にもかかわらず、グレンの間合いの内側に踏み込まれている。

グレンの腹部に鋭い衝撃が走る。

痛みで膝を着きそうになるのを堪えて長刀を振り抜くが

——当たらない。

気がつけば間合いの外へと離脱されている。

動作の予兆なく移動を終えているという、術理不明の不可解な現象。

だが、今までの攻撃と比べて、明らかに重い一撃。その意味はだけ  
はよくわかる。

「…………… テメエ、さっきまで手エ抜いてやがったな？」

「だとしたら？」

「そりやお前…………… 最高の気分だぜ！」

不意打ち気味に、目の前に佇むロアに斬りかかる。

踏み込んだので、上段からの振り下ろし。

歪んだ空間ごと斬り裂くと言わんばかりの斬撃は、風景の歪みに沿  
うようにロアを外れて地面へと抉り込む。当たらない。

剣を振り切ったグレンの顔にロアの膝蹴りが突き刺さる。

「い、あ」

近接戦は不利、そう判断する。

飛びのきながら口を噛み切り、牽制がわりに炎血を吹き散らす。吐  
き出した血液が爆発、ロアを巻き込むように閃光を放つ。

当たったかは不明、だが距離は確保した。

一旦、体勢を立て直そうとして……………

「どこに行く?」

「……………っ!」

いつの間にか、懐に潜り込まれている。

炎の弾幕を乗り越えられたわけでもないのに、なぜか目の間に立たれている。数度の交錯で、間合いの主導権を完全に奪われていることを理解した。

こちらの意志で距離を取ることができない。

だが、近付いてくると予測はしていた。ならば対応はできる。

先ほどの一瞬で、鞘に収めた長刀を抜き放つ。

「閃、撃イイイ!!」

異形の血液が、鞘の内部で燃え上がる。

爆炎の加速をもって、『赤色鬼』の抜刀は神速へと到達する。

火焰の威力をもって防御不可、抜刀の速度をもって回避不能。

グレンの持つ、必殺の一撃。

本来であれば。

「無駄だ」

「はは、ちくしょう」

世界が歪む。

ぐにやりと、刀身がロアを避けるようにして通り過ぎる。

攻撃が、届かない。

振り抜かれる拳を、グレンの視界が捉える。

空いた手で庇うように、一撃を最小限の動きでいなそうとして――

「がっ……………!?!」

一瞬で背後に回り込んだロアに殴り飛ばされる。

予兆のない移動、受け身も防御も間に合わない。

バキボキと身体の内部が破壊される。怪力に身体をくの字に折り

ながら瓦礫の山に叩きつけられる。

この瞬間。

間違いない、グレンがロアに圧倒されていた。

「……………く、くくく。なるほどね」

ごぼり、と口から溢れた血を、手で拭う。

弾けた内臓と、砕かれた骨が再生する激痛を味わいながら、グレンは笑い声をあげる。

否、ロアの魔法を理解した今、笑うほかない。

不動のままに距離を詰め、間合いから離脱できる機動力。

いかなる攻撃も、軌道を捻じ曲げて無効化する防御性能。

その二つをもつてして、一方的な攻撃を可能とする規格外の空間支配能力。

それがロアの魔法の正体だ。

逃れられないはずの密室爆撃を受けてなお無事だったのも、例の魔法のお陰だろう。

「反則だぜ、ソレ」

「そうかもしれないな」

強い、どころではない。

もはや理不尽の領域だ。

攻撃の主導権は、常にロアに握られている。

こちらは一切の攻撃が届くことはなく、そもそも動きすら捉える事ができない。

見えているのに触れられない、捉えているのに届かない。

まるで幻。

—— 故に『幻狼』か。

これがかつて世界を滅ぼしかけた魔王軍の一人。

地獄を積み上げた先兵の一体。

「はははははははは！ 感謝するぜ『幻狼』！ この戦いは期待通り、いや期待以上だ！」

ゆつくりとグレンが立ち上がり、刃を鞘に収める。

鮮血無双の『赤色鬼』は両の足で大地を踏みしめ、腰を深く下げ、僅かに鯉口を切って構える。

相對するロアは動かない。静かにその場で佇んでいる。

虚空支配の『幻狼』は不動のままに地平のすべてを踏破できる。

燃え続ける世界の中で魔族達が向かい合う。

肌を焼く焰光。

臓腑を焦がす大気。

もはや炎熱で無事な建築物は一つとして無く、あとは燃え尽きるのみ。戦いの後に残るのは破壊の痕跡だけだ。

「さあ、ともに生命を燃やそうか！」

「黙れ……………お前は——一人で死んでいけ」

\*\*\*

静かに呼吸を止めた。

大気の魔力が脈打つ。

殺気というべき気配が強まった瞬間、歪んだ空間にロアの姿が掻き消える。

呼応するように、グレンが『閃撃』を反転しながら放つ。

勘、或いは第六感とでもいうべき反応。

間合いを自在に支配する相手は、常に奇襲することが可能である以上、グレンはそれを踏まえた上で対応する必要がある。だが姿が見えてからでは、対応が到底間に合わない。

故に、自身の経験から成立する直感のみでグレンは刀を振るう。

斬撃が、背後に立っていたロアを捉える。

だが無意味だ。

「……………ツチ！」



だが、歪んだ空間に阻まれ刃は届かない。

「げぶっ!？」

ロアが全力の打撃が鬼を撃ち抜く。

拳で顔を叩き潰し、蹴りで膝をへし折り、肘で骨を砕き、膝で内臓を破裂させる。衝撃で吹き飛んだグレンに追いつがり、容赦なく追撃を加える。

立ち上がれば殴る、逃げようとしても追い付き殴る。

反撃してくれば間合いから離脱し、隙ができれば距離を詰めて殴り続ける。

返り血の『炎血』で四肢が焼け付こうと動じない。

グレンの人体を破壊し、再生し始めた部分からもう一度破壊する。

無論、死ぬまで。

「が、ふ、げ」

「して、やる」

こんなにもあっさり弱っていく魔族を見て思う。

なぜ、最初から戦わなかったのかと、思う。

——優しい、青年だった。

厄介者の魔族である自分を拾い、自分の店で雇い居場所を与えてくれた。

自分を雇うメリツトなど何もない。客が減ると理解して、仕事の覚えの悪い自分をそれでも店員として雇い続けた。

暗い過去が追い付いた時すらも、「逃げよう」と手を差し伸べてくれた。

言い訳ができないほどに最悪な状況になっても、ロアに恨み言の一つも言わなかった。

弱い人間だと、今でも思う。

力ではなく、その在り方が。

ロアを助けてしまうほどのお人好し。他者を傷つけるくらいなら自身の損を許せてしまう性格。大切なもののために、本当に大事なものが見えなくなるタイプ。

呆れるほどに人畜無害な人間だ。根本的に戦いに向いていない。こんな世界では、割を食う方が多いに決まっている。

ロアの争いに巻き込まれたのも、ほとんど自業自得だ。死んだって文句を言えない。

けれど、ウィル アーネストは、幸せになるべきだった。

「殺して、やる……………！」

身体が鉛のように重い。

魔力の枯渇が始まってしまった。

空間支配の異能は強力であるが、相応に魔力消費も大きい。無理な身体活性も加わって全身が悲鳴を上げている。

じきに限界が来て動けなくなる。

だが、それら不都合を意志の力で捻じ伏せる。

いままで押さえつけていたウィルへの感情が、理解できない思いが彼女自身を突き動かす。

弱っていく鬼を破壊しながら、考える。

ロアが、守らなければならなかったのだ。

自分は戦う事だけしか知らない魔族で、脅威を叩き潰せるだけの力があつた。

けれど。

なら、どうして自分は、魔法も使わずに戦っていたのだろうか。

未練がましく『赤色鬼』の命を奪わずにいたのだろうか。

そうだ、戦わなければならないと理解しながら、それでも殺すことを避けていたのは、あの青年がなにか大事なことを話していたから。ロアに拒絶されてもなお、恨み言の一つもなく、暴力にさらされながら必死に吐き出した言葉は――

それでも貴方は、もう誰も殺さなくていいんです。

「……………ああ」

拳を止める。

彼の言葉を、思い出した。

決別する前に聞いた彼の言葉を、思い出してしまった。

「これは——殺せないな」

「……………んだよ、つまんねえの」

グレンが拗ねたように呟く。

ロアが止まったのは一瞬。

だが、決着が着くには十分な時間だった。

辺りに散らばった、鮮血と流血が起動する。

光が満ちる。

音が消える。

歪みを纏った狼を、地獄の炎が呑み込んでいった。

\*\*\*

綺麗な、月が見えた。

瓦礫の上を、ロアは転がっていた。

とつさに空間を歪めたが——完全には防げなかった。

最後に受けた爆撃で全身が痛む。

魔力も尽きたせいで、身体も満足に動かせない。

遠くで地面を踏みしめる足音。

視線だけを動かすと、グレンが佇んでいた。

ロアと同じか、あるいはそれ以上に満身創痍と言った風体だった。

徹底的に身体を砕いたのだから当然か。

それでも立ち上がっている所を見ると、因子ベースとなっている魔獣が予

想以上に強力だったらしい。少なくともロアの因子にはここまでの再生力はない。

「よう、『幻狼』。勝負は俺の勝ちか？」

「…………… ああ、お前の勝ちだよ『赤色鬼』」

あれほど闘争を望んでいた『赤色鬼』は、自身の得た結果に納得が  
いっていない様子だった。

「お前は強かったが弱くなっちまったな」

「…………… そうだろうな」

嗚呼。

そうだ、『幻狼』は弱くなってしまった。

強く在り続けられないほどに、『ウゝズ』はあまりにも心地よかつ  
た。弱さに慣れてしまうほどに、ウィル アーネストは優しすぎた。

故に、勝負に負けた。

いや、最初から勝負にもならなかったのか。

「なあ『赤色鬼』、お前はこれからどうするつもりだ？」

「ああ？ …………… そうだなあ、死ぬまで戦うな」

「戦う、か」

「それが俺だ。それが魔族だろ。——— まア弱い奴を殺しても

仕方ねえ、適当に強そうなやつ見繕って喧嘩吹っ掛けるぜ」

グレンが刀を振り上げる。

勝者には栄光を、敗者には死を。

魔族であれば誰もが知るルールを執行しようとして、ふと動きを止  
める。

「そういえばお前、元魔王軍なんだってな」

「…………… ああ」

「じゃあ四天王だったってのは本当か？」

ずいぶんと昔の話を持ち出してくるものだ。

まあ、隠すほどの事でもない。簡潔に応える。

「いいや、私はただの一般兵だ。四天王は別にいるよ」

「…………… お前より強い奴がいたのかよ。四天王は化け物ぞろ

いだな」

「そう、だな」

魔族にバケモノと呼ばわりされるといいう皮肉に、思わず笑う。

だがアレらは、まさしく別格の存在だった。  
「まあいい、じゃあな『幻狼』。お前は弱かったよ」

最後の会話は終わった。

瞳を閉じる。

苦しい人生だった。悔いもある。

けれどあの青年との時間は、ロアの人生で何よりも

「いやいや、何勝手に話を締めようとしてるんですか」

巨大な何かが、落ちて来た。

どぶん、と粘度の高い液体のような、重量感のあるナニカ。

それはしゅるりと流動しながら、グレンとロアに波打って接近する。

「ああ!？」

「これは

突然の飛来物にグレンが飛びのく。

だが動けないロアは、そのまま身体を呑み込まれる。

一瞬だけ警戒した後、困惑する。

害意を感じない。それどころか身体を保護するように蠢くもの、見たこともない程に巨大だがこれは

「これは—— スライムかア!？」

「そうですよ」

朦朧としていたロアの意識が覚醒する。

どこか温かい、落ち着いた彼の匂い。

咄嗟に声がする方向を見る。

「なんで

目を見開く。

くすんだ茶髪、無感動な瞳。

年齢以上に若く見える青年が、目の前に立っている。  
目頭が熱くなる。

声が震える。涙が頬を伝う。

胸の奥底から、いくつもの感情が溢れそうになる。

「どうも、助けに来ました」

ウイル アーネストが、そこにいた。

## そうだスライムでオ○ホを作ろう2 (上)

凄まじい惨状だった。

辺り一面が火の海に沈んでいる。建造物が斬り裂かれ、あるいは怪力で叩き潰され、地面をひっくり返したかのような破壊痕がそこら中に見える。原型を留めているものが見当たらない。

何度か戦場を目にしたことはあるけれど、これほどの破壊を見たのは久しぶりだ。

これが魔族同士の戦いかあ、と一人で納得する。

「はしゃぎ過ぎじゃん……………」

元氣百倍どころじゃねえ。

こんな地獄絵図をたつた二人で生み出せるのだから、改めて魔族の規格外さに呆れてしまう。ただの人では辿り着けない領域、強さという概念の一つの到達点ともいえる存在が彼らなのだ実感する。

まあ、それはそれとしてだ。

「よ、い、しよ」

「おい、やめろ、はなせ……………！」

巨大スライムに浮かんでいたロアさんを、膝と肩に手を回して抱え上げる。本人は嫌がっている様子だが、満身創痍なせいで抵抗も出ていない。

彼女の負傷を見て顔を顰める。

服が焼け焦げてボロボロ、露出している肌には裂傷のような傷が見えるし、なにより手足が酷い火傷だ。爆撃に直で晒され、手足を炎に突っ込んだような怪我だった。素人目に見ても病院直行レベルの重傷である。

「…………… 気絶していたんじゃ、なかったのか」

「いや、めっちゃ気絶してましたよ。けどスライムに起こしてもらいました」

気絶前に僕を起こすように命令しただけだ。

僕の従魔達はどこにでもいて、たまたま近くに潜んでいたスライムの一匹が起こしてくれたというだけの話。起こし方が僕の顔に張り

付いて呼吸器を塞ぐという、かなり危険な覚醒方法だったため酸欠で死ぬところだったが、どうにか目覚めてロアさんを追いかけてきたというわけだ。

間に合って良かった。

辿り着いたらロアさんトドメ刺されかけてるのだから滅茶苦茶焦った。道中は出てくるタイミングとか考えてたのだが、実際は慌てて割り込むしかないくらいにはギリギリな状況だった。

そんなわけでなかなかいい仕事をしたと思っっているのだが、助けられた本人はそうでも無いらしい。腕の中のロアさんが僕を睨みつけている。

「どうして、此処に来たんだ………！」

「それは――」

答えるよりも先に、ロアさんが続ける。

「関わるなど言っただろう！ 力で脅しただろう！ なんで、危険なこともわかってるのに、どうしてお前は………！」

僕の服を掴み、声を震わせて彼女が叫ぶ。

いくつもの感情が入り混じった表情で彼女は涙を流していた。

「頼む、逃げてくれ………。私にはもう、お前を守るだけの力がないんだ」

うなだれるように俯向く彼女は、いつもより小さく見えた。

魔族は、生まれながらに孤独だ。

少なくとも、味方よりも敵の方が多い。

故に強くなければ生きられなかった。強いからこそ戦いの人生の中で生きていられた。

生存のために必要なのは「強さ」という要素のみであり、おそらくは『幻狼』が最も信じて疑わなかったモノ。闘争における勝利と生存こそが強さであり、強さこそが何より揺らがぬ存在証明なのだから。だが。

だとするならば。



今の闘争で敗北した彼女には、いったい何が残っているのだろう。

「ロアさん」

少しだけ考えて、伝えるべき言葉を紡ぐ。

名を呼ばれて、蹲っているロアさんがびくりと肩を揺らす。

「すみませんでした」

はっと彼女が顔を上げる。

「お前は、なにを」

「旅行の件です。ロアさんほどに、僕は現実を見ていなかった。怒られるのは当たり前です」

マジで怖かったぜ。怒ったロアさんはよオ……………。

凄まれた時は死ぬかと思っただし、逃避行を誘って突っぱねられたのには割と傷ついたし。目が醒めてすぐに追いかけたけれど、もう一回断られたらどうしようとか考えてしまおうし、道中は自分で自分を励まし続けて、止まりそうになる足を動かしていた。

だが、ロアさんの方が正しいのだ。

経験豊富な傭兵の『幻狼』が逃げられないと判断した、その意味なんて少し考えればわかることだ。すでに手詰まりの状況で呑気に逃げまじょうなんて、甘えたことを抜かしてる愚か者なんて絞め殺したくもなるだろう。

「違う……………っ！ あれが、あんな本性が、私なんだ」

「なら、なおさらです。現実を見ていなかった。けれど何より」

「ロアさんという人間を見ていなかった僕が悪い」

別に人間の心の中まで理解しろとか、本音を見抜けとか、そんな無理難題ではない。

簡単なことだ。

誰かを助ける行為は美德かもしれない。

手を差し伸べる行為は尊いのもかもしれない。

何かを守るといふ行為は素晴らしいのもかもしれない。

だが、ロアさんを助けるべき人間だと決めつけていた僕は、目も当てられないほどに最低だ。

本当に反吐が出る。

無用な救いに価値なんてない、いわれのない施しなんて不快なだけだ。とんでもない醜態をさらしてしまった。

最初から自分に何一つ期待はしていないけれど、それでも自分の落ち度は取り戻さなければならぬ。

「だからもう一度、<sup>チャンス</sup>機会が欲しくてこの場所に来ました」

ロアさんの目を見る。

やり直すのだ。

もう手遅れなのかもしれないけれど、それでも自分が後悔をしないためにできる事をする。

僕は彼女の強さを詳しくは知らない。

だから僕は僕が知る、彼女の良いところを口にする。

強さ以外を、肯定する。

「ロアさんは、真面目で、仕事は飲み込みが早くて、勉強熱心で、細かいところまで気を利かせてくれて、近所の婦人と子供に人気で、なによりこんな僕と気軽に接してくれる」

嗚呼。

なんて格好悪い。

誰でも思いつくような言葉の羅列。もつと他に言いようがあるだろうに。人も見れてない上に、上手く口も回らないなんて本当に情けない。

けれど、仕方がない。

情けなくとも、言い切るのだ。

「笑顔が素敵な、貴方の力になりたい」

誰かのためでなく、自分のために。

彼女を失いたくなくて、僕はこの場所へ辿り着いたのだから。

「そ、そうか、わかった」

「……………え、なんですかその反応」

ちよつと—— いや、かなり思い切って話したにも関わら

ず、ロアさんの反応は微妙な感じだった。

なんか俯いて目を合わせてくれなくなったな。というかなんか顔が赤い。

いや、当たり前だ。

自分で自分がレベルの恥ずかしい御託を並べたのだから、そりや聞いている方も恥ずかしくもなるだろう。はあー恥ずかしい、穴があったら入りたいというやつだ。これだから口下手にアドリブで話させるのはダメなんだよ。

でも、もう少しはつきりした返事が欲しい。このままロクな反応もないままだと、僕がべらべら一方的に話しただけの恥ずかしい奴になってしまう。

「わかったってどっちです？ 僕は力になる方向で進めたいんですけど」

「こ、こら顔を覗こうとするな。それでいいからっ、今は見ないでくれ……………」

「約束ですからね」

よし、言質は取った。

なら、あとはこの戦いを終わらせるだけだ。

—— まあ、そこが一番の難所でもあるのだが。

「…………… お待たせしました。すみませんね、待たせちゃって」

「気にすんな気にすんな。最後の会話を邪魔するほど野暮じゃねえや」

長刀を鞘に収めて、グレンは少し離れた位置に立っていた。

さして気にした様子もない返答。

当たり前だ。

すでに『幻狼』との戦いは制している。目の前にいるのはスライムホールを売っている一般人。僕が戦いの素人であることはとうの昔に察しているだろう。消耗しているとはいえ、焦る理由もなければ、警戒する理由もない。

あちらからすれば消化試合も良いところだ。

「さて、あらかじめ言っておくが命乞いは受け付けてねえ。この場に  
いる奴は皆殺しが俺の方針だが――状況解ってるか？」

「まあ、そこそこですかね」

僕の言葉を、グレンが鼻で笑う。

「いいや、解ってないね」

「……………」

笑みの表情を張り付けてはいるが、グレンから苛立ちの感情が伝わってくる。

「動作の一つ一つが隙だらけだ。戦場経験のない素人なのが一発で解る。危険を承知で現れた心意気は評価してやるが――」

グレンが鞘に収めた長刀に手をかけ、腰を下ろすように構える。

臨戦の態勢に呼応するように、空気が張りつめていく。

全身を突き刺すような――殺気ともいふべき気配に身体が強張る。辺りは燃えているというのに、肌を撫でる空気は驚くほどに冷ややかだ。

「世の中、気持ちで乗り越えられるほど、現実には甘くはないんだわ」

「……………ずいぶんと、言いたい放題言ってくれますね」

「当たり前だろ。来なけりや助かった命を捨てに来た、切り捨てられるものを切り捨てられない。それは優しさじゃなくて弱さって言うんだぜ」

相對して、対峙して、向き合ってようやく理解する。

眼前の男にとって弱肉強食こそが正義であり法。そして目の前の相手は無慈悲極まるルールの中で、常に勝者側に立ち続けてきた圧倒的な捕食者だ。

「殺してやるよ、ウイル アーネスト。お前は自分の弱さのせいで、ここで終わるのさ」

そう言つて、鬼は凄惨に嗤つた。

まともに殴り合えば勝負にならないだろう。戦闘経験なんて比べるべくもない。目に見える強者が、確かな恐怖と脅威がそこにはあった。

戦火の中に生き、闘争の流血に塗れ、地獄に棲まうが如き、なによりも赤い鬼。

—— 故に『赤色鬼』

「ウイル……………」

ロアさんの声で我に返る。

恐怖か武者震いか、自分の身体が震えているのがわかる。けれど、それだけだ。

「言いたいことは、それだけですか」

「…………… あ？」

がさり、と茂みから音がした。

出てきたのは一匹のスライム。拳大程度のサイズの小さな魔獣だ。さして珍しいものでもない、探せば見つかるようなありふれた魔獣の登場。

だが、グレンがその異常事態に気付く。

「気持ちで乗り越えられるほど現実は甘くない、でしたっけ。大いに同意しますよ」

「なん、だア…………… !？」

がさがりがさりと、音がする。

岩の陰から、木々の隙間から、スライムが這い出して来る。

2匹や3匹どころではない、10や20でも話にならない。どこに身を潜めていたのか、数えるのも億劫になるほどのスライムが、この場所に姿を現していく。

膨大な量のスライム群が、僕達を囲むように形成されていく。

「なら、現実を乗り越えられるだけの物量を用意するだけです」

「こいつら、全部テメエの眷属か……………！」

難しい事ではない。

スライムに限らず、群れを成すタイプの魔獣使いには可能な芸当だ。十分な環境とリソースがあるのなら、群体型の魔獣は数を容易に増やすことができる。

そしてスライムは超低コストかつあらゆる環境に適応する魔獣。

その増殖速度は他の魔獣の追隨を許さない。

「馬鹿げた数だな、全部で何匹いるんだ？」

「さあ、いちいち数えてませんが……………まあノスト全域は僕のスライムなんじゃないですか？」

ノストを拠点としての2年間は決して短い時間ではない。

フィールドワークによって野に放たれた僕の使い魔は、辺境全域を分布範囲として収めている。

グレンとロアさんの戦闘場所に辿り着いたのも簡単な話。

僕のスライムがそこに居たから、感覚共有で見つけたというだけだ。派手に暴れているのだから、場所を割り出すのにも時間は掛からなかった。

もはやこのノストの地において、スライム使いの僕が把握していない場所は存在しない。

「終わらせませんよ、何もかも。いつも通りに、僕は明日も生きていきます」

「……はは、なかなかどうして曲者じゃねえか。期待なんて毛ほどもしてなかったが、これなら思ったよりは楽しめそうだ」

グレンが獰猛な笑みを浮かべる。

居合の構えを保ちながら異様なほどに前傾していく。深く深く身を沈め、力をため込むような、明らかな突撃の形態へと移行していく。

「じゃあなウィル アーネスト。自分の弱さを思い知って死んで行け」

「かかって来いよ『赤色鬼』。孤高気取りの強さっていうのが、どの程度のものか確かめてやる」

そうだスライムでオ○ホを作ろう2 (下)

「…………… 奴は血液を媒介にして炎熱を操る。戦うのなら注意しろ」

「了解です」

「…………… すまない」

それだけ言い残して、ロアさんが意識を失ってしまった。

もともと限界だったのだろう、よく意識が持った方だと思う。呼吸は安定しているがはやく病院に運び込みたいところだ。

さて、カツコつけて啖呵を切ったのはいいけれど、命が掛かってるプレッシャーで気が重い。

したり顔で大量のスライムを集めてみたけど、いくら集まろうがスライムはスライムなのでコケ脅しどころか肉壁にすらならない。

巨大スライムだってそうだ。いっぱい魔力取り込んで人間包めるサイズにまで育ったけど、身も蓋もない言い方をすればデカいだけだ。スライムさんの平和的移動速度ではただの的である。弱点の核も剥き出しだし。

対して相手は圧倒的な格上である。

実力は遙か彼方。

闘争経験は天と地ほどに離れ、読み合いなんてできるはずもない。戦闘技術は言うに及ばず。身体性能スベックの差を埋めてくれるはずの魔力も、僕の身に宿る量ではあまりに頼りない。

対戦相手の『赤色鬼』さんも消耗している筈なのだが、ノリノリで剣を構えてるところを見るとスタミナ切れも狙えなさそうだ。

ロアさんが気を利かしてこそつとアドバイスくれたけど、「気をつけるか…」ぐらいの感想しか出てこねえ。

こんな僕で、奴に勝てるのだろうか。

……………



なんか考えるの面倒臭くなってきたな。

というかここまでやっておいて、今更逃がしてくれるような相手じゃないし、怖がるのも無駄な気がしてきた。

てかよく考えればだんだん腹立ってきたぞ。

こっちは店員殺されかけた挙句、『ウゝズ』を爆破されたのだ。

起きて外出た瞬間に、店が吹っ飛んだのはビックリしたわ。まじで。

……よし全力で行こう、あとは野となれ山となれだ。

魂の繋がりを通して敵を討てと命令し、ひとときわ巨大な一匹の使い魔に魔力を送り込む。

魔力を供給して自身の魔獣を強化する。従魔士としては当たり前の手段、単純明快な使い古された戦術。

だが、足りない。

目の前の相手を超えるには、まるで魔力が足りていない。

ゆえに命令を下す。

一体ではなく全体へ。

単体ではなく群体へ。

力を寄越せと命令する。

返答は魔力となってやって来た。

呆れるほどの魔力を、考えることもなく巨大な使い魔に叩き込み、問答無用で強化する。

『オーバードライブ』  
『過負荷強化』

行けスライム。

ハイパーつよつよ体当たりだ。

\*\*\*

戦いにおいて魔力の保有量は、強さを測る指標の一つとなる。

理由は至極単純、自身の戦闘能力に関わるからだ。身体能力の活性化、従魔士であれば魔獣の強化、魔族であれば魔法の発動と、戦闘能力に直結するからこそ魔力量は重要視されるのだ。

効率の良い補給手段として性交渉を行うことが当たり前なほどに。そして魔力量 $\parallel$ 強さの等式が成立するほどには絶対的だ。

極端に言えば、魔力量の多い方が戦いを有利に進めることができる。

それを踏まえて、ウイル アーネストはどうだろうか。

肉体性能、技術、経験においてすべてを上回る悪鬼に対して、魔力さえも劣っているスライム使いは、為すすべなく敗北するしかないのだろうか？

『オーバードライブ  
過負荷強化』

否である。

ウイル アーネストには、奥の手が存在する。

ぎゅるりと膨大な魔力が、突如として巨大スライムへと流れ込む。

巨大な使い魔は供給される魔力を喰らい、呑み込み、取り込むことでその体積を増やし、ウイルの戦意に反応して流体を波打たせ

爆発的な速度で突進した。

「がッ!？」

人間大のスライムがグレンに直撃する。

赤鬼が拮抗する間もなく弾き飛ばされる。

肉を叩き潰すような怪音。次いで骨がベキベキと碎ける異音が体内で響く。

人間を包み込むほどの大質量が超高速で叩きつけられる威力は——もはや交通事故と言って差し支えない。だが過剰な威力を受けてなお、鬼は獰猛に喘う。

「は、ははははは！」

悲鳴を上げる身体を、持ち前の回復力で強引に修復しながら着地する。

速い、速すぎる。

先の戦いで見た『幻狼』と遜色ない速度。

どう考えてもスライムが持つ本来の性能ではない。スライム使い程度の魔力では不可能なはずの、大量の魔力による強化が行なわれている。

その反則イカサマの正体を、赤色鬼は即座に看破する。

「——群体統率による過剰強化、か」

グレンは知っている。

群体型の魔獣を操る従魔士の技術。

自身の魔獣が形成した群れから魔力をかき集め、一匹の従魔を超強化する最終手段。個々の魔力が少ない群体型が、格上殺しを為すための最強ワイルドカードの切り札。

これがウイル アーネストの奥の手か。

ゴミに等しいスライムとは言えど、安全圏一帯を掌握するほどの数量から魔力を集めれば、確かにグレンの喉元に届き得る——

!!

だが。

「ああ、ソレは見たことがある」





「まさか、テメエ!!」

気づいた。

一つだけ手段が存在する。

ウィル アーネストには他者の魔力を最高効率で受けとる方法が

この世界には確かに存在する。

「ウチはスライム専門店ですからね。主力商品は手広く販売してるんですよ」

スライムホール。

あれはスライムを加工した道具。そして用途はウィルの使い魔を用いた自慰行為。つまりそれは言ってしまうえば人間とスライムの性交渉だ。使用する本人たちにその気はなくとも、発射される白く熱い情熱には大量の魔力が含まれている。

ならば可能だ。

本来不可能なはずの、大人数の最高効率での魔力供給が—— かつてないほどの超大規模で成立する。

「僕もね、遊びでオナホールを売ってるわけじゃないんですよ」

性玩具界隈で空前絶後の大人気商品。

年間を通して飛ぶように売れ続け、ついに販売数は10万個を突破。スライムホールを利用するユーザーからの圧倒的な魔力供給は、二年前から途切れることなく続いている。

金策のためではあった。

だが、それよりも求めているものが彼にはあった。

目的は最初から一ミリたりともブレてはいない。

全てを失ったあの日から、ウィル アーネストは強さが欲しかった。

大事なものを守るための、確かな強さが欲しかった。

「そうさそうとも！　これこそスライムマスター群体奥義『白夜継承』  
!!?」  
「売れば売るほど強くなるってね」

自信たっぷり、ウイル　アーネストはそう告げた。

グレンは動かない　「否、動けない。」

何をしようが結果は同じだ。死ぬ気で足掻いてみたとして、圧倒的な質量と数量を持った魔獣相手に一体何ができる？　どう考えても数匹倒して力尽きるのが関のやまだ。

この状況は、既に詰んでいる。

「　　」  
「はは、こりゃやられたな。お前が、オレの終わりかよ」

「別に、命までは取りませんよ」

「……………あ？」

「ただでさえ死人を見るのは懲り懲りなんです。夢に出てこられても面倒ですし、お仕置き程度で済ませておきますよ」

愚か者を見るような表情でグレンが顔を顰める。

「生ぬるい奴だな。やってることは問題の先送りだぞ」

「わかってますよ」

「どうだかな。そんな性格じゃ、いずれ後悔するだろうぜ」

かもしれませんね、と青年が頷く。

「まあ後悔ばかりの人生なんで、今更一つ二つ増えたところで変わリ  
ませんよ」

「……………ツチ、つまんねえ奴」

「よく言われますよ、根暗ですから」

スライムが動き出す。

隙を見定めていなければ、読み合いをする素振りもない。思いつきで動き出したかのような、あまりにもお粗末なスライムの突撃行動。だが、膨大な質量と数量、そして圧倒的な速度を持っているとなれば話は別だ。

崩れた建造物を踏み潰し、逆巻く炎を呑み込み、木々をへし折りながら突き進む様はまるで雪崩。

あまりに強大で、誰であろうと為す術がない。  
それはグレンですら例外ではなく

——大質量は抵抗すら許さずに、地獄の悪鬼を呑み込んで  
いった。



## ちよつとした後の話

月が見える。

「あ？」

見知らぬ場所で、意識を取り戻した。

ゆっくりと身体を起こして周囲を見回す。

戦場として選んだはずの廃工場はどこにも見当たらず、辺りは樹木が生い茂る森の中だ。

ただ、無視するにはあまりに大きな『道』があった。

廃工場があったと思われる方向からグレンの場所まで一直線に何もかもが破壊されている。

膨大な質量であらゆるものを押し流し、踏み鳴らし、圧壊し尽した跡が、目の前にはあった。

災害にはあまりに不自然、されど人が行なうには規模が大きすぎる。異常現象としか思えないソレに――グレンは心辺りがあった。

「おっかねえな」

スライムだ。

それがこの破壊を生み出した正体だ。

グレンが為す術もなく呑み込まれた大質量攻撃の跡がそこにあった。

「……………運がよかったわけじゃない、か」

どうやらあのスライム使いは、本当に命までは取らなかつたらしい。

災害に匹敵する威力をモロに受けて生きていられるほどグレンは頑丈ではない。つまり今生きているのは、あの青年がスライムに命令を出し「押し流す」程度で済ませたからに他ならない。

なんという甘さ。  
なんという弱さ。

だが

そんな相手にしてやられたのだから言い訳もできない。

闘争こそが本領であるはずの自分が戦いで負け、さらには命まで見逃されている。

完敗だ。

まごう事なき敗北だ。

「これからどうするかね」

もう一度、戦うつもりはない。

見逃されたゆえの義理もあるが

幻狼とスライム使

いに再戦を挑んだところで、返り討ちに遭うのが関の山だろうという判断だ。闘争は好きだが、わざわざ勝ち目の薄い事がわかる戦いに身を投じるほど、グレンはこの戦いに執着はしていない。

なにより奴らの在り方を、多少なりとも理解した。

奴らは強さではなく、強さ以外を選んだ人間なのだ。

己の戦闘性能ではなく、生存のための戦略ではなく、闘争に適した精神でもなく、勝利を求める貪欲さでもない、もっと別のナニカに重きをおくのが奴らの在り方だ。必要であれば命を懸けるほどに。

強さこそが全てであるはずのこの世界で、非合理的な選択をする人種。

グレンにとっては闘争こそが生であり、殺し合いこそが娯楽であるが、幻狼とウィルはそうではない。見据えているものが違い、立っている場所が違い、なにより価値観が違う。

そんな連中と何度も殺し合いを興じるほど、グレンは見境なしではない。

というか面白みがないので戦いたくない。一度戦って実力と在り



服の衣擦れからさえも快感をうけとってしまおう。

言葉にならないほどの激感に崩れ落ち——その衝撃の快感に悲鳴をあげる。

ガクガクと全身が震えを感じながら、グレンが辛うじて思考する。これは、攻撃だ。

何者かに強力な毒を撃ち込まれた結果がこれだ。だがおかしい。

消耗しているとはいえ、グレンに一瞬で接近して離脱できるような怪物など、そうそういるはずが——

「まさか……か……」

いる。  
いたはずだ。

ロクにノストの街を調べはしなかったが、それだけは興味深い内容であるが故に覚えている。

それはノストの安全圏が生まれた頃から存在する。

それは人を襲い魔力を奪うが、死なない程度で解放するが故に無害と放置されている。だがその実情は強大すぎるせいで排除不可と諦められている辺境最強の魔獣——!!

「テンタクル、だと……」

安全圏から出なければ問題ないと失念していた。

広大な辺境で一体の魔獣に出くわすことも、確率的に考えればほとんど無いはずだ。にも関わらずヌシに遭遇するとはなんと運の悪

「……………」

「本当に運が悪かったのか？」

いや、違う。

ウィル アーネストは、ノスト全域に使い魔のスライムが棲んでいるのだと言っていた。廃工場での戦闘を見つけ出したように、奴の魔

獣が感覚共有で索敵を可能とするのなら――脅威であるヌシの動向すらも把握していたのではないか？

ならばこの目の前の状況は、全て奴の想定通り――

別に、命までは取りませんよ。

お仕置き程度で済ませておきますよ。

ウイルスは命は取らないと言うような、甘い人間だ。

だが、その代わりに別の地獄を用意する程度には――甘くない人間だった。

ビクビクと体が震え、まともにごくことができない。

樹林の闇から、赤黒い触手が無数に這い出してくる。

辺境のヌシの全容は闇に阻まれ見る事ができない。だが、ゆっくりと音もなく現れる触手それは一度囚われれば、飽きるまで逃さないことを理解させた。

「あの、やろオ！ ふざけん――あッ」

ぞるり、と大きく波打つ音が響く。

引き攣った表情の鬼は、悪態を言い切るまもなく夜の闇に呑み込まれて――消えた。

\*\*\*

「……うーん？　なんか忘れてるような」

「……………？　なんの話だ」

「独り言ですよ。気にしないでください」

ベットで寝ているロアさんに、りんごを剥く。

病院に運んだロアさんは案外元気だった。

今にも死にそうに見えたのだが、単に魔力が足りていなかっただけらしい。町医者のお爺さんが魔力ポーションを飲ませたらすぐに目を覚ました。

傷も時間はかかるが綺麗に治るらしい。

魔族ってすげー。

「そんなことより、また『ウーズ』で働いて欲しいんですけど」

「あぁ、店長がいいならよろしく頼む」

思ったよりもあっさりと返事がもらえた。ちよつとだけ意外だった。

まあOKなら文句はない。

「じゃ、そんな感じで」

「だが、いいのか？ また迷惑をかけるかもしれないぞ」

「……………あー」

赤色鬼が言った通り、今回僕がしたこととはただの先延ばしだ。目の前の問題を力任せに押しつけただけ。ロアさんがもつ過去のしがらみを解決するにはほど遠い結果だろう。

もしかしたら、追いついた過去がまた彼女を苦しめることになるのかもしれない。

彼女が望まなくとも、周囲も巻き込んでしまうのかもしれない。

まあ、だとしても——彼女がもうしばらく「ウーズ」で働いてくれると言うのなら、僕も答えは決まっているのだ。

だから言い切る。

「その時はまた力になりますよ」

うーん恥ずかしい。

やっぱり向いてないよこういうの、風呂入って寝たいわ。今日一日振り返って布団の中で「あああああああー」って絶叫したい。



## 商業都市ヴァルト編 品評会

そうだ、スライムでオナホールを作ろう。

案外悪くない発想で生まれたジョークグッズは、僕の想定以上に利益を上げた。

元手になるスライムがタダみたいな物なので冗談みたいなローコストで量産可能。

掛かる費用は運送代と販路開拓くらいのものになるのだけれど、一度スライムを届ければ送り先で増殖するし、開拓にしても企業から提携の契約をお願いされるような状況だ。

利益配分を決めれば、あとは売り上げに応じて勝手にお金が振り込まれてくる。

凄まじい勢いで増える貯金に正直怖いという感想しか出ないが、それを除けば非常に順調だ。

最近は食品としてのスライム販売店「ウゝズ」の知名度も高まってきたているし。

基本的には。

この状況で文句なんて言いようもない。まったくもって結構な話なのだけれど、金が集まればそれに合わせて相応の面倒も出てくる。

例えば税金絡みは、数字に杜撰な僕は頭を抱えたくなる所ではある。

だが今困っているのは、もっとコミュニケーションを求められる話だ。自身の才覚を頼りに利益を上げ続けるような者達が一堂に集まり、自社の製品やら取り組みやらを売り込むようなヤツ。

いわゆる品評会的なのである。

「そんなに嫌かね、社交の場は？」

「正直、苦手というか。僕みたいな人間は場違いにしか思えませんね」



「はっはっは!! 今をきらめくスライムマスターが言うのと嫌味にしか聞こえんな!」

大声で笑いながら髭をなぞるスーツ姿の男性を見る。

「国家に武装を卸してる一ノ瀬重工に、利益云々で嫌味もクソもないでしょう」

「かもしれない!」

一ノ瀬ジュウゾウ。

その手の業界では知らない人間はいないくらいの大物だ。

会社は包丁一本から重火器まで幅広く取り揃えているような超がつく大企業。品質が確かで国内外問わず、売る商品は絶大な人気を誇っている。

そんな企業の重役がごろごろしているのだから、家に帰りたくもなる。

明らかに一介のスライム売りが来れる場所ではないし、目の前でニコニコしているオッサンの招待がなければここには来なかった。

「僕の養父との仲があっても、やり過ぎですよ」

「バレル・ロウには世話になったんだ! キミとも知らない仲じゃないんだ、仲良くしようじゃないか」

僕の養父は傭兵だったのだが、護衛をしていた時期があったのだ。

養父が死んだ後も、一ノ瀬氏は何かにつけ面倒を見てくれていたのだが、たまに無茶な話を持ち込んできたりするので困る。

「今回みたいなのはやめてくださいよ。心臓に悪い」

「善処しよう!」

大企業の重役がスライムホールを見て、「ほう...」「これが例の...」とか言いながら説明を求めてくるのだ。試しに置いておいた新商品に関してには真顔で喰いついてくるし。

怖すぎるだろ。

「まあせっかくの商業都市ヴァルトだ。楽しんでいこう」

「..... それもそうですよね」

やや引つかかる所はあるが、一理あると頷く。

商業都市ヴァルトといえば、世界中のあらゆるものが流通する交易

の中心点だ。

「お金さえあれば、あらゆるものが手に入る」とまで言われるほどに、あらゆるやり取りが盛んな場所だ。後ろ暗いところも含めて、世界有数の栄えた場所と言っていいだろう。

目新しい商品もあるだろうし、品評会を終えたら市場調査をしてもいいかもしれない。

新商品を市場で売って見るのもよさそうだ。

「ああ、そういえば！ 紹介をしたい人がいてね！」

「はあ、僕にですか？」

「もちろんだとも！」

一ノ瀬氏が手招きをすると、少し離れた場所から少女が現れた。

歳は17くらいだろうか。

夜を染め上げたような黒髪、落ち着いた紺のドレス。

どこかジウゾウ氏の面影がある整った顔立ち。嫌なことがあつ

たのかやや不機嫌そうだ。

なんだろう、嫌な予感がする。

僕の気持ちなんて当然知る由もなく、一ノ瀬氏がニッコニコで話す。

「うちの一人娘さ！」

「……………一ノ瀬ユイです」

ああ家族か。

道理で似ているわけだ。

知り合いである以上、家族の紹介くらいはするよな。

まあ挨拶も済ませて、ここらへんで退散するのが吉だろう。経験上、妙な空気の時は何か起こる前に逃げるに限る。

養父もそう言ってたし。

「あ、どうも、ウィル アーネストです。では、僕はこれで」

「待ちたまえ!!」

腕を掴まれる。

クソ、力が強い!! 本当にデスクワーク主体の人間の力か!?!  
不味い。

この流れで目の前の面倒臭い親父が、まともなことを言ったためしがないのだ。

「可愛い子だろう!? どうだろう！ お見合いをしてみる気はないかな!?!」

「ええ……………」

この場合はどういう返答が正解なんだ。

助けを求めて一ノ瀬ユイを見るが、彼女は暇そうに髪の毛を弄っている。援護は期待できなさそうだ。

正直乗り気じゃない。

ていうか勘弁して。

かと言ってその場で断るのも失礼に当たりそうだ。

この手の話は出された時点で一旦受けるしかない。

そう気づいた僕は、やむなく引き攣った笑みを浮かべた。

## 見合い

大企業の社長がひしめく品評会をなんとか終えた僕は、一ノ瀬ユイを連れて街へ繰り出すことになった。

正直、困った。

お見合いなんて初めてだ。何をすればいいかわからない。

だが、交流のある相手の大事な娘を放置するわけにもいかないの  
で、現在は適当に街中をぶらついている所だ。

なんだよお見合いって。

異性と付き合ったこともない奴にいきなり振るイベントじゃない  
だろ。

そんな感じでやや思考停止気味だったのだが、一ノ瀬ユイにとって  
はそうではなかったらしい。

「最初に断っておくけれど、私は貴方に微塵も興味がないわ  
「アツハイ」

「どうしても見合いを進めたいというのなら、芸の一つでも見せても  
らえるかしら。薄っぺらい人間には難しい事でしょうけど」

素晴らしいまでの脈の無さだった。

社長の態度からすると、今までも何度か似たようなことがあったの  
だろう。

僕なんて彼女からすれば有象無象もいいところだ。街へ繰り出し  
て数分足らずで、彼女に振られてしまった。

どうやら恋愛頭脳戦はここで終わりのようだ。

どうか彼女が僕に興味が無いなら、そもそも始まってすらいない  
までである。

勝負どころか相手にすらならないのが悲しいところである。

そんなことを考えていると、やや拍子抜けしたように彼女が首を傾

げる。

「……………怒らないの？」

「一ノ瀬重工のお嬢様に比べたら、薄っぺらいのは事実だしね」

「今までの見合い相手に同じことを言ったけれど、大抵は不機嫌になるか、怒鳴るかしていたわ」

「まあ人によっては怒るかもね」

大企業のご令嬢に、民間のスライム売り如きでは役不足だろう。

社長からの話とは言え、僕なんかと面談を組まされた彼女には同情している。

隣を歩く一ノ瀬ユイをまじまじと見る。

品評会の時に来ていた淑やかなドレス姿から、極東の学生制服に着直している。

セーラー服というやつだ。

ドレスを着ているときは大人びた印象だったけれど、今の制服姿は年相応の少女といった雰囲気になっている。

「ま、僕はユイちゃんの役に立たない護衛くらいに考えてよ。シヨツピングの荷物持ちくらいは出来るだろうしさ」

この街に滞在する間に、何度か顔を合わせをして欲しいというのがジユウゾウ氏の話だ。

僕としては彼女と外で時間を潰しておくのが適当だろう。

そもそも見合いなんて互いの了承が前提みたいなものだ。

彼女に気が無いならそれでよし。

とりあえず一緒に出かけるだけでもジユウゾウ氏の顔は立つ。

「護衛……………、そういえば従魔士だったのね」

「万年Eランクだけどね」

やっていることはスライムを増やして売るだけだ。

ランクなんて上がるはずもない。

そもそもEランクは戦闘能力が皆無な人間用の評価だ。

スライム使いが得られる最低限のランクにはロクな依頼が回ってこないの、何か特殊な依頼を請けない限りは上がりようがないのだ。

「なんの魔獣を従えているのか、聞いてもいいのかしら?」

自分の魔獣の情報を教えることを嫌う従魔士は多い。

理由は魔獣の種から大まかな戦闘スタイルが割り出せたりすることがあるからなのだが、僕の場合は商品として売り出しているので隠すつもりはない。

なので普通に応える。

「僕の魔獣はスライムだよ」

「…………… スライム?」

どうやらジユウゾウ氏は僕が、ナニを売っているのか説明していなかったらしい。

久しぶりに「なんだこいつ?」みたいな表情で見られた。

「素人質問で恐縮なのだけど、弱いことで有名なアレかしら?」

「そうだね」

「どこでもよく見る魔獣、だったかしら?」

「それだね」

「時折、食材としても取り扱われている?」

「間違いないね」

「…………… つ……………?」

おー、めっちゃ困惑している。

普通に考えるとスライムをタイムする人間なんていない。まともな反応だ。

爪も牙もない。

おおよそ人を害するとは無縁の魔獣がスライムだ。

まあ自己紹介には丁度いい。

「歩き続けるのもなんだし、座って話そうか」

「…………… ええ」

近くにあったオープンカフェに入り、適当にお茶を注文して席に着く。

「さっきも言ったけど、僕の従魔はスライムだよ。ほら証拠」

従魔は距離に関係なく呼び出せる。

手の平に小さいスライムを召喚し、何匹かテーブルに転がしてみせ

ると、一ノ瀬ユイが目を大きく開く。

プルリとした透明な玉状の流動体、ゆらゆら真ん中に浮かぶ核。

どこからどう見ても、なんの変哲もないスライムが、日の光を淡く反射してキラキラと輝いていた。

「触っても?」

「大丈夫だよ、スライムだしね」

スライムをすくい上げ、ゆっくりと彼女に手渡す。

ぴくつとやや慎重な素振り見せながら、手のひらに収めた小さなモンスターを指でつつく。

僕の小さな相棒は相変わらず無反応だ。

ただひたすらにぶにぶにと触られるがままになっている。

「…………… 悪くないわ」

「それはよかった」

どうやら一ノ瀬家のお嬢様はスライムをお気に召したらしい。

硬めのスライムは、ぶにぶにした感触が癖になるのだ。

触っているだけでも案外楽しいし、巨大なサイズにするとクツションとしては最高になる。性能としては人をダメにするレベルだ。

「でも護衛としては失格ね。柔らかくて敵と戦えないわ」

「いやでも、凄い勢いでぶつけたら相手を倒せるよ」

先日戦ったグレン曰く、魔族でも重傷を負うレベルらしいし。

だが冗談と捉えられたらしく、クスリとユイちゃんが微笑む。

いやマジなんだって。

「…………… さっきは失礼なことを言ったわ。ごめんなさい」

どこか沈んだ表情で、一ノ瀬ユイは頭を下げた。

「なんとも思っていないよ。少し驚いたけどね」

「いつもの父の差し金かと思ったの。血筋に由緒ある家の子息かと思っただわ」

「相手としては適当じゃん。ぶった切る意味くない?」

やや自虐気味に彼女が笑う。

「本当にそう思う?」

「違うの?」

「一ノ瀬家は武器を売って短い代で地位を上げた一族なの。家に歴史なんてほとんどない、いわゆる成金ね」

「国に影響を与える程に栄えてはいるが、それは極東の名家からすれば面白い話ではない。」

「まあ言ってしまうえば、一ノ瀬家は上流階級内では疎まれる位置にいるらしい。」

「あーわかった、面倒な相手と見合いをさせられてるんだ」

「血筋の良い方の自慢話で済むならいいわ、でも実際は嫌がらせばかり」

「最初の態度は、さつさと見合いを終わらせるための方便だったらいい。」

「まあ上手く行かない顔合わせを続けることを考えると、多少無理にでもさつさと切り捨ててしまった方が楽なのだろう。」

「どうやら一ノ瀬ユイも苦勞をしているようだ。」

「その点、貴方は地味で気を遣わなくていいから助かるのよ」

「これ、褒められてる?」

「ええもちろん、貴方のその人畜無害さは誇っていいわ」

「あつ褒められてないなこれ」

「そもそも僕みたいな陰気な人間には、無害くらいしか取り柄がないので間違っていないけど。」

「短い間だけれど、よろしく。私のお見合い相手兼護衛さん?」

「そんなこんなで商業都市ヴァルト滞在での数日間。」

「僕は一ノ瀬ユイとのデートをすることになるのだった。」